俳句日本

十二月號

第一卷第七號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和十九年十二月三十日（毎月一回卅日）發行

昭和十九年十二月二十五日印刷納本

みいくさ集

秋の日水に足を洗ふ一兵我は　谷しんいち

漂渺動哨と壹の穗とうごく　富岡のぼる

空母撃ちてし戰勢ずんと多に入る　木内柳陀

銃眼がありうごきやまぬ野菊の花　岡涓二

誠忠上聞に達す多朝椿の木　山田宗作

決戰決勝の時至れり芒をわけて歩く　九貫十中花

勝つ家々の構へをみなへしなどの草むら　南晴星

銃たてかけるきうした木の垣木の冬芽　羽根田繁時

古兵山ぶだうを曳れる隊列が細徑　村上芳男

馬こゝから沙漠となる薄暮十月　本間昇

兵士におそい月の出蜜柑水仰向いて飲む　大澤蓬舍

秋の日經が見ゆるやう報道を聞いてゐてその鑑　山田蒲公英

多枯れの山襞はつきりしてこのやうなる兵の一日　大竹北汀

穗草に伏す彈藥はらに重み　矢崎博敏

しんに暗くここに待避す秋草の手ざはり　會田明

枯葉卷く野を增產隊の號令で行く　佐藤岭雨

ひたすら山の田と生き陽日を郵便やるんで　高取芳春

聲張つて氣張つて國の子は國の本を讀む　園木六食子
豫科練のわかうど人生二十五年だと柿喰ひながら　英吉更
刈株刈株讀氣だち學徒奉仕三日目　小野暮仙
血型きまるわが手夜長徹して仕事　川津一之
還るなきを今や離陸すふれふれ帽を觀るわれも　新倉三之介
機械の轟音にゆれやまぬコスモス野の姿　渡邊如闌
小菜もよく雜魚もなほよく配給戴いてゐる　菅壽吉
緒を切らしたままこの雨を働きに來た小女　吉岡久藏
米鬼まとに弓をきりりと秋草ふまへ　岡田初枝
決戰水車は水涸れぬ秋を廻つてそれでよい　中川水草花
職場に防寒具は要らぬ朝の太陽が赤い　海見惠善
體當り機のことが終日胸にあり夕べの松の木　岡野宵火
戰果の旗出してゐる島の家里もみえてゐる　片岡樹裏人
一機一艦へ命中すと、嗚呼、白菊の白きさへ　瀧山重三
戰果にこたへて精密器增產のしづかに落葉してゐる木　津田笹彦
柿も赤し雁來紅も赤し來らばきたれ　細谷野蕗
艦隊起てりときく軍艦行進曲の宵月である空　武遺青杏子
月をはなれる雲よる雲艦隊出擊報ず　日向野秀策
神風今ぞ知れこの日白菊の太いなる　村瀨汀火骨
擊滅は空にあり秋空ただしづかなり　北田山口彦

俳句日本作品

一選句錄

一碧樓選

○○隊　羽根田繁時

神國霧のはれ山ぐつと近い杉山
猛し蘆原風吹けばこゝに戰ふ
秋起つ草原の風は草のにほひす進軍
機銃うつ砂地にて汗ばむからだわが軀

越後　細山金剛

朝起きてすぐ土踏んで出づる芋畠
轟を噛んで見る月明の山つゞき
門出ばんざい麻畑の青さ箒草の青さ
桃ひとつたべる桃の匂ひひろい桃畠

秋田　石岡水鳴

牛動く虎杖うごく花あり
旋盤ひかり据り穗草の朝に
家々家ふかく稻穗を入れる月夜
夏から秋へ青いしやつを着る機械廻轉

○○隊　本間昇

君が善戰祈る卷脚絆まくを見てゐる秋宵
秋山をたちのぼる黒煙を眼鏡あはせ
しづかに昇つた月しづかに月餅いたゞく
水の動かぬ水の邊を進軍薄暮

幕舍を出る草が霜つけてゆれる
女栗をうつ家が土壁
柳の葉散る流れに舟の中にも

諏訪　矢崎博敏

愛知　奥谷魚石

昨日今日雨栗の實の堅きを
紫釣鐘草の花山みちが分れる
月夜橋から見る河原の乾き

立川　守矢自由也

研究室にひゞきなく流れ朝の淡霧
燃料置場そのへんの霧にふかるゝ
雲うすし整備員らに風つのる枯草

石川　松原颯々

刈田ぬかるむにむらの兒ら家鴨ゐる
芒束ねありたえまなき野の練習機
いも畑戰力たゝへ月夜の低い家並

山形　澤渡尚之

實石榴揺るゝあたり大方は常磐木
實石榴一枝籠に挿すに竹の籠
熟に見る秋果の輝り卓に影あり

越後　三雲城東

晩秋工場の機械動き黒い人動き
必勝こゝに網沈めて音ない秋海
木瓜の實包ふ石が光るこの石肌

名古屋　平井青三

海際からの芒原しけてくるに鳥とぶに
晩稻も刈つてしまひ川の水の流れ

秋出水にうつる山のかげ雲覆ひくる　　宮城　宮本夕漁子

仔山羊繋いで秋の日のかげす白いそばの花　　長岡　藤田三六亭

秋朝飛來する白鷗あるにいでたち少女ら　　宮城療　谷口矩良

みいくさ祈念秋のおやまに鳩群れとぶ平坦があり　　青森　井上星樹

單衣着てゐて傷兵に配給の丸い梨　　東京　金内錫四

出水のあとの水澄みて溝べに秋薊　　宮城療　村上幸々

懸巣鳴くこゑ山の木の實が熟れる　　香川　新田巣州

かもめどり島近くとび島の山がもみぢす　　東京　下平天耳

海の星冴え荷積む船の灯や動く人々　　秋田　佐藤西呂

あられ地を打つ親子に青き栗蟲　　〇〇隊　村上芳男

襲撃ち身を投げて伏しこゝも同じ草いきれ　　愛知　鈴木一斗石

兵日々の訓練さ搖ぐ秋草への愛情　　〇〇隊　大淵青柴

落葉を踏んで延々一列縦隊われら　　宮城療　齋藤達也

この灯を下げて母と葱を揃へる　　備前　黒瀬潮鳴

草の枯れいろ或日は鶺鴒とびし　　宮城療　齋藤達也

川あり秋山へみちありて人行けり　　宮城療　齋藤達也

そばの花が咲き山肌に働く人見えて　　宮城療　齋藤達也

道邊草のみのりかやのほぬきたくて　　宮城療　齋藤達也

山肌をあるくどんぐりの實二つ三つ手にして　　宮城療　齋藤達也

便り書くりんだう挿して外氣舍の灯　　宮城療　齋藤達也

りんだう地に美しく太い傷兵の杖　　長岡　藤田三六亭

夕燒空廣く落穗を拾ふ學童のかげ　　長岡　藤田三六亭

炭を選る少年爐はすでに火を吐き　　東京　金内錫四

庭の焚火けむりのありて泉水の水　　東京　金内錫四

鉢菊を日南に出すほどの庭　　東京　金内錫四

空澄みこゝにわが前落葉する　　宮城療　村上幸々

秋晴木々のずがれ山茶花咲きまじり　　宮城療　村上幸々

兵器部品を研ぐ窓明り秋天　　宮城療　村上幸々

とふとく拜し恩賜の楓いろづく　　宮城療　村上幸々

こゝろ海に通ふ砂の枯草を踏む　　宮城療　村上幸々

小鳥の來てゐるところ穂草密生　　秋田　佐藤西呂

稻架ある濱べ舟濱にかへり　　秋田　佐藤西呂

秋天うごくやう一隊叉銃をとく　　〇〇隊　大淵青柴

馬ゆく仔馬ふかく秋草に入り　　〇〇隊　大淵青柴

強行つゞく芒原の向ふ青海原つゞく　　東京　下平天耳

行軍夜の暗さになれし星飛びし川面　　東京　下平天耳

警戒中異狀なし雪を肩に動哨歸る　　東京　下平天耳

秋深み護國神社へ部隊とし歩々の響　　備前　黒瀬潮鳴

電車疾くひつじ田の青きこの朝　　備前　黒瀬潮鳴

征ける家畑を稻架でかこひ稻架にある入口　　備前　黒瀬潮鳴

牛が群れ河原の秋草を踏めり　東京　坂岸桂保

水車どうどう廻り山の木々紅葉し　備前　横溝竹水

いま夕焼空ひろし君と別るゝ　富山　中川尚三

曼珠沙華を折るに畦の蓬草ふまむ　越後　田部直枝

そばの花咲き少年航空兵が擧手の姿勢　〇〇隊　中恒三郎

稻みのり家低い黄楊垣　遠州　中村とし子

夕べ山の青さ茄子畑茄子の花咲き　豊川　櫻澤喜作

菊の蕾青く我等に決戰の氣魄　越後　田部直枝

山見えず霧の中水車を据ゑる　〇〇隊　中恒三郎

瓶の射干七分開く花ありさうした日々　遠州　中村とし子

稻架場の土を踏んでかへる女たち今宵　豊川　櫻澤喜作

栗の木の栗毬垂れてある芋畑昏くなる　越後　田部直枝

たんぼの畔に降りてゆく人の單衣の老人　〇〇隊　中恒三郎

海見える多菜畑につゞく海べ一村　遠州　中村とし子

あけびがよくうれしをとらう木の中　豊川　櫻澤喜作

みかんのふとり夕べ煙きゆるところ　越後　田部直枝

茶の花咲き朝は山羊に身をよせ　〇〇隊　中恒三郎

月夜人の中にならぶ工場を離れて　遠州　中村とし子

茂りより茂りへ子等かがまりてすゝみ　豊川　櫻澤喜作

子等うたひてかへる茶畠路の茶の花しろき　越後　田部直枝

茶の花咲く赤土畠の畦かたきをふむ　〇〇隊　中恒三郎

霜朝機械黒く立並ぶへ工員ら動けり　東京　坂岸桂保

君と話す兵器の事ばかりを霜の路の上　佐渡　瀧浪龍雄

萱葺屋根に淡き殘雪ありて桑の木　夕方冷える二階からの海の色　秋田　高橋安榮

鉢の柿をとりともしびの下で子供　多雲が動かず海峽の眞中を走る船　秋田　高橋安榮

新嘗祭かしこみ串魚を食べる　あかい目をもつ兎に水霜とけし　越後　笛木杜松

帆船行つてしまふやがて雪くる海の上　越後　笛木杜松

稻こく埃の中に聞く比島レイテ灣の戰果　秋田　澤口潤一

ぎんなんをもらつて疊におくその白い實　秋田　澤口潤一

穀倉はだん〳〵増してゆく日短し　兵庫　蓬萊智子

稻を刈る無言霽れて片雲もなし　兵庫　蓬萊智子

柿赤くなり雲の流れ遠い　青森　工藤折葉

工場の廣い道歩く秋の戰果を感じ　會津　渡部東迷路

笊一ぱいのきのこ此日が暮るゝ　會津　渡部東迷路

坂を下るに坂下の老母莚麻の實をもぐ　青森　工藤折葉

越して來てこゝに桐の木に桐の實　雨しみる土に松葉牡丹根赤きみだれ

東京　松本薫

苛いみかんわけ合つてゐる機械場の人

栗むいてゐる人ありこゝ蘆花公園

岡山　二宮秋歌樓

稻うれる畦道に遠き山の入日

朝露あり畦道に蝗とる男の子女の子

東京　伊藤秋轟

椎の實くろぐろ土にわれらほゝゑましく

朝霧に戸を開き朝霧の庭の八つ手の花

東京　上木彙葉

工員等の歸途海は赤い月の出

交替このとき火蛾狂ふ風房ともり

備前　二宮香芽子

散り殘つた柿の葉のそよぎ雲とび

花のみえて山茶花に薄陽曇り日

備前　岡　丁子路

諸蟲ひけばいもの一つ日ざしつ

大戰果あるをきゝ星夜家に歸り

備前　仁科孝子

捷報つゞき庭にコスモス咲き亂れ

少女何か云ひたい氣持コスモス咲いてゐる

岐阜　大榎生

學童ら稻子捕りに川の向ふ稻田道ゆく列

喬木に百舌鳥啼いて薪割る朝

倉敷　不破默平

短日一念眞直やすりをかけ

一生苦勞して伯母が死んだ稻刈時

岐阜　門村嶋吉

子等は團栗拾ひから戻りきし醫にて

箒草のたね袋に藏ひ濕りふくみて

東京　佐藤かめ雄

すゝきと赤まんまと風吹き至り

音がわが耳にしのつく雨となりし秋夜

美作　淺野一草子

朝から日照つてをり廠を刈りとる男

夏夕雲多く河水音高く

陸軍院　角南眞

子のみとりする母ありて稻の秋

尾道　美原素子

ひろ〳〵月の瀨戸見えて車中の人々

越後　丸山白水

御陵鳥啼く秋日青苔に洩れて

岡山　桂四郎

子等並んで通るに萩多く

東京　島田啓生

稻熟れるいろ藁屋大きくかげす

廣島　後藤眞知枝

殘業する空に七つ星あきらかにして

〇〇隊　村下卿子

壕の中にて見し小蟻の列長し

福山　武村門田女

師を送るこゝろ八つ手の花咲きし

新潟　八木茶凡

秋空とぶ鳥のありて井戸水を汲む

○井泉水選

あるけば朝の音樂の雲　仙臺　櫻田輝郎

木と木の影と散る葉が朝々霜になる　東京　里井正子

貨車ばかりの汽車が通つていつた子供とみてゐる山の秋です

月の葉に道があるおまつりの笛　愛媛　武田桂

林の、枝がズブリズブリと出てゐるひる月である

農場の揚揚塔と屋根とそのあたり雲があかとき

よべのあめからあけた秋のまどにきつちりはつてある紙

街路樹の大きな葉が散つてゐる日なたと日かげ

風の夜花のある布團縫ふてゐる　栃木　鹽田正吾

木の幹に蟹がゐるのも雨あがつてゐる

葉のかげの紅い薔薇の風がある蕾

尾花に風があるので話したいことがあるといふ

梅もどき朝は朝雲の晝は日南になつてゐる　岡山　岡田花野

菊に富士のある白しその障子先生わたしら

きのみくさのみはれておまつりになる

月が雲をぬぐとさざんくわのはなびら

巖にくだけて散る潮のはや曉

傘のまはりしづくしてゆく娘さんの白菊

母へ暖いもの縫ひあげて萩の眞盛り

泣きつくして空の青さよ　徳山　揚井乍

白い服が白い服と向ふの向ふまで麥が黄いろい　朝鮮　尼崎佐藤龍

油の香もよいもうこんなになつておれの服である

ベルト流れ行く朝へ朝の日が流れ

松が召されて行く大名通つた道を行く秋

木犀、み佛の古い扉へ鍵もちて

穗すすきここに來て獨り食べる母の握飯です

時到るを、到りてぞ白菊の白きに露霜

いちじく熟れて日のさし石臼の音、それをひく　福岡　藤川白涼

風がたしかに秋である靴なほし屋さんとてふてふ

海が夕日の馬車が一臺かへつてゆく

汽車が通るころのシグナルの雨はれてゐる山

朝日山をはなれると北の風吹く國旗揭揚　秋田　照井燈光

雨のもる傘でこの家へとむらひにきてゐる

茶の花和尚さんも朝のお仕事です

佛の顔へ會はせてあれこれとくれてゐる

住みついてからすなく杉の木のした掃く　東京　印南健治

石あたたかな草枯れてゐる

堤は櫻紅葉する川の向ふおまつり

落葉まだ蟲の鳴くここら雨はれたところ

異人さん手をかざして見る遠い山々が秋

東京　日野　素木

胡麻の花にはよんべの雨、東京へ行く
蓮田しまひごろの花汽車降りて細いみち
夕方一回だけ通るふみきり番秋日山に入る
鐵橋濕れてきて汽車が濕れて笛吹いてゆく

東京　堀切　春扇

ばくおん一日植木屋さん多がきてゐる
やんま飛べば山がある遠くにも山がある
機械につばきの一輪皆さんお休み
星が出て月が出て殘業してゐる

大連　重村　順孝

日々霜近く工場は殘業の名月である
枯れて降つて用水桶の雲が赤い夕べ
あちこち青い木の下の三々五々盲啞生徒秋の日
ダルニーと言つた頃の家々此所は廐舍の跡で物干竿の日がくれ

大阪　菅崎　道雄

うすべらな雜誌にも秋風の立つてきた籐椅子
敵機來らばの月があかるくて用水と火たたき
怨敵悉退散、しづかなる月は天心にあり
勝つためといふ子供疎開するあいさつにきてゐる

和歌山　御井　弓絃

秋ももう、蜻蛉が來ては疊に卵生むことをする
庭たづみにも西してからは暮れるばかりな雨はれてゐる
雨あとの山の澄みやうと夕燒の稻が實いてゐる
海へつきだして岬の木々が一本一本の空

京城　篠崎　鳩坊

機械が機械を作る音その音やんで工場晝時
枯れあじが水に實に靜かに日ぐれ
音のして降り音なくて降り一日降りつめてゐる寒ばば
てふてふ、バスはあるものの歩いてゆく

東京　中邨　五倍子

鳴いて飛んでゐる五位鷺の十六夜が晝のやうな
コスモスレンズに向つてゐる娘さん、笑つてください
隣の階段の音や壁ごしのこほろぎやひさびさに戻り
傘がしづくする程な小雨の、直きこの道老婆も

吹田　青蔭　香

町の夕空が秋つまつてゐる
暖簾ごしゆききの見えて給着る頃となつてゐる
御陵へつづく森の朝の日靜かなつくつくほうし
晴れた海へ秋の道がひとすぢ

大阪　阡陌　多代

白い毛糸が輕うて朝の雨があり
雀、柊の花が小米のやうな
時計が鳴れば晝はひとりの日のさし

千葉　闘根ふさ子

軍歌で行く兵隊さん雨の中歌ごゑ遠くなつて行く
リスがゐて椎の實をたべる椎の葉ゆれる
みんなで柿を食べ柿のたねこちらは元氣と戰地へ書き

三重　水野田々詩

警報出てゐる壕の上は風少しあるヒマの木
わくら葉落ちる待つてゐるバスの時刻表
ねぎは箱植えにしてよく育ち朝が薄霜

東京　三井不二雄

柿の木に柿の殘り山べ暮れてゐる道

長い塀に夕日さす子供員がらで遊んでゐる
想ふことのはらはら暮れてゐる枝（波哉忌）
秋田　田口英夫

明治節と大きく書いて明日はあるけふの晴れ
青空くつきりと斷層の冬來る風景
裸で自轉車で來て汗ふいて云ふ言葉
東京　和田靈南

麥畑から兵が馬がぞくぞく麥の穗まつすぐ
多になるたんぽが月夜になる
つめたくラヂオの知らせる事を朝のひや飯だまつてゐる
山口　走內庭草

稻田明るい雨の傘もつて迎ひに行く
雲のところどころ夕空暮れるとたんぱ深いもや
病んで山羊の乳の白い三角巾は自分でします
宮城療　土屋曙子

コスモスが白い月夜をゆく爆音
山の一方明るくなつてくる蕎麥畑月夜になる
岡の國旗に出てゐる風の秋の演藝大會
栃木　齋藤淡坦洞

夕燒もう桶の里芋が洗はれて白く
曇り日の垂穗靜かに黃ばみたり風なく
トントコトンとうどん打つかまどの火の赤さ暮れてきた
三重　鈴木裸蟬

みかんどころみかんどきは夕日に船の入りくる旗
ちりそめてねんねこの中
竹の青さふり明けてゐる
京都　內藤英夫

蝶々ひらひら橋があつて飛んでゆく渡つてゆく
ひとり湯に浸り湯のこぼるる
橋を娘さん花を手にして渡りくる朝
廣島　菅無極

咲いて枯れて乾いてゐる夕日のなか
紅葉に來て夕燒のやうな紅葉の宿に
潮さして夕日のこの土手で釣れるから釣る
和歌山　富田南龍子

朝日、風が大根と菊と吹いて晴れる
島の白菜日に日に育ち朝の日朝風
川口は白い波のはるかに輸送船の通る秋
千葉　福本逸子

段々山も拓かれて青い青い空が續く限りの爆音
空襲警報空の秋雲猫の仔は親とゐる
おそ咲きのあざみがある秋の空氣がいつぱい
福井　吉村しをり

机に美しい蟲が來て障子の外時雨
隣の子にやる赤い鼻緒が縫へました明日はお祭り
むくむくとむら雲に月のただよひ思ふこと胸にたたんであるく
信濃　栗田白夢

田に稻架高く組んでからすがとまる夕日になる
颱風がそれたといふ風が家のうら山
こども戰さに出すどんぐり拾ふてゐる山がぬくとく
秋田　菅原裸歩

しもがれていく草が雨はれた柿の木の影
音は風のすこしあるかやの實おちる
赤い木の葉きいろい木の葉土が日くれる

朝日がそれぞれちがふ色の菜畑學校に行く　征く人を送る木槿の花が白い道の川夜　東京　佐藤葵芳

ほつとあたたかい稻架のそば雞がきてゐる　豆柿を描かうと思ふてゐて日が夕日になる

流るる水も旅で木犀にほつてゐる　大阪　藤原豐　待避の聲とざはめきと寒い空氣と星が美しい

榛の木にもずの聲豆がすず生りで　東京　手塚云水　がらんとした部屋の寒さ生木のいぶる煙である

すつきり晴れて空へ石榴がはぜてゐる　濱松　渡邊天仙果　寢るとして星がきれいな盥は海邊に泊る豫定

花にしぐるる山茶花のはなこぼれてゐる　神戸　中島義光　音は木の實の落ちる音霧の樹の下

枝おろすに白い切口がそれぞれの樹の香り　横須賀　桐井靖夫　また日を雲が通る風の、蘆

機翼の灯が星になつてしまつた寒に灯にゐる　豐橋　大鹽白々　もう自分のものではない身乾布まさつ八ッ手の花

蜜柑齒にしみ遠山晴れ切りて　國土豐穰しろじろと朝霧灯はかすかなり　休日は洗濯してゐる風呂場の窓つばきの花

ひたひた夜波よせうつ河岸のたき火をする　木犀匂ふ道今晩ザーチライト美しい殘業から歸る

熔接のスパークが水面に風がある明けてくる　信濃　栗田千可志　照ればぬくとく黒い貨車にかいてある文字

天の川はつきりと常會にゆく提灯ともす　しぐれてきさうな畑からちぎつてきてその色籠の中

藁塚の霜安産のしらせにゆく　このごろ部屋の中まで陽が照り子供製圖

つるべおとしといつた日がもう畑のもの少し殘して戻る　東京　瀧川安彦　德島　横瀨碧山子

幾度か迎へて講堂の菊の花が開校の紀念日

布團が日の中ふくふくとして日のさし　大阪　梁瀨阿羅興

ちぎれ雲浮んで柿の木美しい澁柿

さうしてそんな話の指が蜜柑の筋とつてゐる　菊薰る日の軍樂ひるの日少しかげり　大村　梁瀨桑水女

毎朝の井戸の音朝々寒くなる　赤のまんまとせせらぎの音と稻刈つたあと

また熱がでてきた壁が寒く暮れてしまふ　名古屋　星島芳子　柿の木二本とぶらんこと遺族の家のよい子たち

豆が芽を出してきた白雲　高知　加藤白水境

疎開の子迎へてきて家から汽車が見えるので

學校が見え屋上手旗振つてゐる秋晴　愛媛　能智愛子

柱に凭りひえびえ日のさし照り

青いづきんのおつかひさんまだ歸らない白い道　廣島　槇原新逸水

お灸でなほつた道も黄菊などある病院廊下　山口　小島胡市

戰果ぞあがるあきのあさあめあがり　川崎　佐藤忠美

ほろほろと、これぞいくさの中のこほろぎ

隊列深夜を行く最上川月あり　大阪　廣橋鋼一

小休止にしよう水車場栗も小豆も干してある

藤の散つてゐる僧のゐて掃いてゐる門を入る　吹田　多胡比左志

開ければ霧は海のやうで爆音夜は白み

銃後、ひとり蝗を燒く　信濃　栗田泉峯

鍛冶工立派にダリア咲かせた

道へ警報の灯出してある寒い雨になる　千葉　深山きよ

月が林の中のみち灯を先にしてゆく　横濱　佐藤龍

ひぐらし松林くろく暮れてゆく

きのふのけふも雨がふる松林雨の音

線側の日が暖いひととき栗の皮むいてゐる　駐滿　眞野たける

朝は指の疵しつかりしばり工場の白い時計臺

山のほすすき道のほすすきつきよ

そこに野菊まだ咲いてゐるいちめん霜　廣島　槇原新逸水

瓦焼く煙りの方へ牛追ふてゆく晝　貝塚　谷雨滴

大根ぬいてきてひるにするとやに三羽の鶏

日曜であつて看護婦さんが干したもの白い月になる　駐〇〇　室岡美和

よく降る雨の雨の音看護婦さんに芋がふかしてある

草からつぎつぎ道に出て月夜の兵になつてゆく　札幌　加藤隆

病んでゐるとだけのはがきの、星の澄みやう秋

少し風邪氣味の空に夕空が美しい　札幌　古田定男

新しいベツド先にして窓の木が雨上つてゐる

からすうろこぐも夕やける　東京　阿部好伸

空の葉の中朱い實子供と

赤とんぼに子供と子供がひろい原づぱ　東京　倉前忠勝

いねかる牛がいつぷくする遠くはれて富士

干して案山子のやうな着物松の木にゐる雀　岐阜　肥田案山子

熟のない朝はベツドの白さ口笛もふく

晝月がケーキのやうな麥笛にしてあるく　東京　加藤喜一

もうはれさうな窓の南天の花縫物してある

風が蜘を一枚いちまい落してゐるあたたかく

電車が魚河岸の人達ばかりで朝が寒い　　信濃　八重田保朗

昏れかかる穂の草牛歩かせてゆく　　東京　清水和子

風がもう多近いホップ棚に殘つてゐる陽

子をおぶつてくつたくのない顔買物籠の青いなつば

隧道の向ふが明るい歩いて青い景色に出る　　東京　兩角良哉

干藷日に日にあまくなるとお隣りものきに干いも

御杜裏は田圃の小川が流れてゐる朝霧　　神戸　高柳登一

家移りするとしてせはしくて此頃暮れ早くて戻る

船がいくつも見えて石炭置場荷馬車が出てくる　　名古屋　澤木昭二

風がすすきの穗にふく坂道牛が上つてゆく

鍬の刃のやうな屋根のかたちこの地帶も冬晴れてゐる　　神奈川　中西國友

擔架訓練モンペさん達の足並芝の秋の日

流れがあると橋がある橋の上とんぼとぶ　　福岡　下田麥

ちよつと降つて暮れるまでの山に虹　　駐〇〇　三國魚竿水

落葉するのを歩かせてゆく　　富山　廣田路一

蟇草はまづ黄いばみて空澄み晴れる　　駐〇〇　石川舟洋

冬空雨となる烟突が四五本　　諏訪　柳平里宇平

寄明り柿の色はへて今日も暮れてゆく　　三重　加藤古椿坊

一廻りして道は杉山、山は少し紅葉して　　神奈川　北村勘藏

電線がどこまでも二本の秋空飛行雲　　東京　藤森昌子

プラタン落葉坂の下へからから風吹く　　東京　河西實

飯時の列が空の飛行雲など柳の散るなど　　大分　種野未知

みちがわかれるみちしるべそばのはなつきよ　　福島　齋藤辰路

戻つて軒先の石で鎌といでみるかまどの口の火が見える　　京都　佐藤直三郎

坐つて襖の字がすすけてゐる鷄頭に雨がふる　　栃木　沖田夜詩香

月夜の道の下の藁家根藁打つ音のする　　東京　茂木和夫

教會の十字架の空の上にも爆音のする朝早く　　長野　山本孝子

山から見える山のかたち雪になりさう　　岡山　楠田知差

灯をくらくひくくして秋夜ひとり針に糸　　群馬　田中千克

ひよこひよこひなたがぬくい雁來紅で

もんぺのかすりのもよう雨の中ゆく　東京　金崎　了

池にふる雨が池いつぱいに降る木の蜘蛛の巣　山形　宮川満喜夫

遠い山の夕日がみちのすすきに風がある　大阪　太田孝介

子ども輪になつてあそぶ廣場の隅の穂の草　大連　鈴木無夢郎

試歩するほどに草がさく　神奈川　野島滋夫

線路のこちらの家と向ふの家と夕日する柚子の木をもつ　東京　及川チカ

毎日の晴天どの待避壕にも南瓜の花　東京　佐竹正

道が曲つて曲つてふるさとの水音になる　兵庫　小笠原辰也

古里は遠くして此處のお祭池にうつつてゐる　青森　石井孝吉

山鳩杉の木櫻は落葉　茨城　水川鋭喜知

豆の芽何か考へてゐる足でゆく　三重　八木貞治

青空と麥が青い芽になつてゐる　徳島　岡崎文江

てふてふ一つ風がある枝　東京　田口一彦

東京八川原鷹機雀、靴なほしやさんタ日になる　八幡　木村次子

裏の家でも薪割る音の朝の寒さ明けてくる　京都　高藤又兵衛

土のあたたかく亡母の植ゑた諸がこんなに掘つてゐる　宮城　天野芳夫

漁夫網を繕うてゐる閑木の葉降る　長崎　中村一二三

雨のあとの草の根を持つ一本一本ぬいてゐる　岩手　黒田誠

門の中の月が用水桶にあかるい戻り　東京　馬場公代

殘置燈の下通り橋が濡れてゐる　京都　酒井望東子

祭の提灯に灯をいれて月になる　朝鮮　岩下太郎

戸の外へ洩れてゐる灯が木の葉ちる木の葉散る　兵庫　大川明二

寒くて學校のさくらもみぢ朝日へ登校してくる　茨城　藤森しげる

海から石段あがり石の鳥居海の音のす　千葉　森本矢司夫

しづくする木の下のぬれてをる石　静岡　牛田郁司

雀がきて木の枝晴れてゐるばくおん　滋賀　沼中赤郎

征く君の顔の月我等にも月夜の道

静岡　溝上愛伊子

旗は今日征く人をヒマは青い實

東京　勝山軍三

枝に葉が重なつてゐる冬になる

開城　村松龍雲

細い道がともつてゐる葉を落した木の下の畑

豐橋　德島猛夫

けふは日曜の黒い木柵のあたたかい日を疎開の子達

東京　小川和成

牛の聲のしづかな夕べになつて細い道

神戸　姫田千賀緒

ひとり來てひとりゐる誰か秋釣つてゐる

埼玉　龍澤流木

竹があつてとんぼとまり雲のかたち

○　卍禪子選

伊那　保科滿藻流

しだく朝露すがし氣の尾根づてくね路

深山花を百合と折り添へて山の宵を手向け

さこそ翼を振り目近む胸壓す爆音（保郷土訪問）

花巻　大森古天

まんまるな月の白さは空のまゝ

門の月けふの落葉が土にある

菊薬と咲き誇る夜を星が降る

東京　木村梨雪

整備員敵機を格納するや夕焼

整備終り油手にいそ飯のうまさ

紙面に捷報あふれる仲秋の朝日をあびて

大島　眞野深紅椿

ひんやり石に白衣である白蓮の花

雲が流るるをむなしく白衣である

みどり葉には紅椿か大島は沖から白浪

滋賀　寺本了諦

南瓜の枯葉窓にかゝる別れの朝

生徒等と戯れし草横になつてみる

よせてはかへす秋の海或日共に泳ぎし

福岡　菅壽吉

椿實となる我等老骨といへど銃後の

何もかもみいくさに老婆一人小菜を搔へる

敵機、監視者の眼に何蝕までも廣い青空

新潟　中川水草花

ヒマワリも敵機見逃さぬかたちこゝが監視所の徑

多の浮ランプ、時化ればこの鯔網の鯔が大漁で

岩百合の岩は潮の香に映じた凪

東京　小川一灯

療舍の女が出て小松に大根懸けられ

敵機來るといふ空秋雲澁へ防火池澄み

床のコスモス並びふるへる爆音低く越え

東京　小磯さゞ波

曉天動員お宮の屋根へ濃い茜がさす

猫やせたのが白菜畑の日だまり通つて行く

福岡　福永友一

ふとよい月夜となつてゐた爆音遠のき

戰地からの第一報來る花かれたままの机　三重　田中富士郎

カヂリついて居た、君の机そのまま（畑平市氏逝悼）

うす暗き事務所君のインキ壺のほこり　岩手　吉岡久藏

緊急作業もけふ終つた體やすめてゐる

稻作をこの頃の雨を放送してゐる雨止まない　東京　吉岡久藏

白いベツトのとべさうもない蠅

ふるさとを思ひ積肥が湯氣上げて居る　東京　大熊敏治

散る葉もやはらかい日曜日の本棚整理

全機命中の話で秋の夜は冷え切つてゐる　岩手　鎌田一相

端座すれば遺骨の前に一本の菊

明方の雲一ひら刈田どこまでもつゞく　四日市　伊木祥園

紅葉谷川に朱を流し疎開學童の體操

團栗を拾ふ子へ團栗落ち續く　東京　田口古桑

校歌　麥の芽の畑を通る

落葉へ園兒圓く坐り先生が眞中　伊那　伊藤酉三郎

診察の時間である顏を横にする菊ノ花白

病院は薄赤い電灯だ、夕暮の子泣く子供　樺太　友定白鷺

凍道馬橇の鈴の音が生れてくる

驛のストーブの火消えかけてゐて星空　福岡　池田房代

今日も敢闘終へ挺身隊揃うて稔田をゆく

おごそかに朝もやを詔書私心さらになく　岩手　齋藤南風

林の徑ゆくに思ひ出の芒の穗

雜木林も近く山に雪が來てゐる　福岡　岡田初枝

たづねあぐみ樹々ひんやりの月の夜となり

海山の幸み靈に捧げてもなほ　福岡　牛尾紀代子

月あかり梢に洩れて神詣の小石ある道

芋の葉に風があり家こつこつと出來てゆく　東京　岩館テル子

晴れて部屋菊花どこからか匂ひくる

農園手休めいつまでも見あげる飛機のゆくへ（賀妹結婚）　臺灣　中山巨子

頰杖にくゆらしつさもあろうニュース聞く

栗赤飯味し十隻轟撃沈と聞く今更に　伊藤岳宗

赤南蠻掛け替へし秋日も暑し

殘り馬糧玉蜀葉つれ夜な夜な今朝の霜　東京　林東雲

遠音の柴笛は低いが青空の奥深さ

神風吹きまくつて敵空母は消えた兵の神風　池上耕山

出來ばへ刈る手打つ又刈る穂づら　　東京　淺見槌惠

お祭りさしてある花も室に秋稔し　　福岡　林田輝子

母居らでもの足りぬ秋の夕餉はらからかこみ　　東京　牧和乃

夕の落葉に歸り錠あけて入る家のうつろさ　　東京　渡邊まき子

その手ふしくれ軍裝のまゝ椰子の陰で寫してある
多は現地になれた叔父の便が來ることしの冬

征く身に人の情がうれしくて秋風　　東京　飯島郁歩

戰果に足どり輕く私も征く秋晴れ　　福岡　田代重豐

ペン走らす音のみ秋の陽の机
あした素足の學童ら多服も混りて

南の島に戰果が大きい、若きわれら工員　　朝鮮　海見惠善

戰ひぬかん南瓜だいて笑み山も夕ばえ(疎開學童)　　金井茂記

俵の數を戰線の兄へ書く　　東京　久保田和磨

紅葉空と水の青さにさゆ　　東京　南千代子

日記の頁轟沈に又增える　　東京　窪田芳子

枯野遠い果から白い鴿子續く　　東京　竹內草堂

せんばんの音にこだまする南溟の勝どき　　東京　淺見槌惠

勤勞に生く喜び山もほゝ笑む　　東京　牧和乃

大なることだまを想ひほゝえんで征く　　東京　野田勇氣

かすかなる笑みさへふくみがへらじな荒鷲　　東京　牧山秋水

捷報萬歲人聲の上に青空　　東京　大井上正浩

白き富士の威容の上青空　　東京　中村倉次

秋空に高く銀翼陽に照らされて　　東京　倉田綾子

菊日和感激の戰果ニュースを聞く　　東京　久保田琢磨

空地の大根逞しき力に拆れる　　東京　西田春泥

夜更けペン先が光る蟲の聲　　東京　千葉大帆

蕎麥挽き終り納屋內陽のさしくる石臼　　東京　佐藤無角

空に松籟を聽き地に栗の落つるを聽く　　東京　古賀謙二郎

東京　池上澄江

雨晴れの戦時農園芋の葉の露が光る

東京　江部美智

樋の雨だれにぶい音して家々の冷たい灯がつく

東京　高内千代子

秋晴れほこりつぽいかわら屋根が光つてゐる

浦和　木本梵天

霧の深き艦潜行そのごとき秋のゆうべ

浦和　立花しげり

旗玉肱く街を過ぎ黒布の旗の町に入り

浦和　戸島三更

茜雲多近く黒く並んで工場の煙突

浦和　戸田みゆき

板敷にころげ長い影して丸いどんぐり

浦和　戸田まゆみ

落葉のしめりも篝草びつしりの雛木山合

浦和　丸山羊三

更けての夜まはり厠の屋根に栗鼠がゐて月は秋

浦和　田中加六

銃後の誓朗誦する生徒跣足にて朝冷え

浦和・中村竹雨

火の見の鐘もゆれてゐる學童傘ささず戻り

浦和　西牧言人

松の木肌の赤き葉の青さも秋の西日

東京　櫻井しのぶ

早い冬が來た野原のみつ葉所々

東京　鷹谷いさみ

東京　池上澄江

原ッパ散策雀が近寄つて來て鳴く

東京　清水千惠子

水鳥ねむるゆる〳〵漕舟も遠くなつて

福島　廐生嘉子

森に入ると牛の聲がかすかにきこえる

福島　岩本富美子

秋晴だ稻が刈り取られていなごを捕ります

池上あつし

ハタと跂路なし岩に碎くる川沿ひたてる（奥御料）

群馬　山岸忠弘

朝の河原日は松の木に區切られ

群馬　大野進見

火のくづが一つ殘つた夜の火鉢

群馬　龍田光男

秋の夕たきびのにほひがする

群馬　中澤三郎

故郷を想ひ出す夜の點呼

群馬　柴崎新

藁屋根に赤くのこるからすうり

群馬　上原正司

神神の森、清くたゞ一つもみぢの紅葉

群馬　渡邊之次

朝霧もはれる愉快さ稻こきの音

群馬　岩井隼人

もくの木に人が登つてゐる秋風

群馬　高橋貞治

滑空機若人は大空をのむ氣持

近作鈔

○一碧樓選

霜の砂利をふむ應徴士急ぐ手をふる　諏訪　守矢自由也

一兵の母なり胡桃など干してゐる

子を空へやり一つの太陽を多空を愉しみ

少女は兄兵隊をおもふ庭落葉を焚きて

傷痍のひとたしかに杖を地につきて冬草

○○隊　谷　しんいち

茶碗に水をのむちゝはゝとある夏夜

壺に草のものいけ部屋つやゝかに夏日老夫人

部屋に子供二三人をり窓に咲いた夕顔

夕顔さいてゐる窓しめてねてしまつた家の人

汽車がゆく山あひ谷あひを秋の日を征く男ら

秋田　相澤華芳

楓がもみぢこの朝にめざめ

人に藪など草もみぢなど明るきに堪へる

濱多めく近づくに浪の打ついろ

戰意滿つ國原穗芒のさうごかない

母と在り冬の日の胡桃を割り

京都　西山刀耕

ずゐきのあかめのずゐき流星しきりに

進んでおれがおれがどんぐりあつめ

神饌の前榊ぬきすてる身仕度をなさん

をとこを感じふだん草まく男のにぎりこぶし

青紫蘇しん〳〵あり降りやまぬ雨

羽後　吉岡南呂

自然薯を掘り上げその空の雲かたまり

霜朝の水のうごき簀圍影し

遠くの山陽あたり水田水落つる音

一天落葉吹きあがるおもしろし童子

筏が岸をはなるゝ渦にありて木の葉

秋田　三國屋白省

菊がまづ黃菊さき通勤にでる

禁獵鴨の水ひろくして

畠大根よりなく大根おほ葉青々

牛がなく方に野菊うす紫にさき

牛の乳房霜がきてをる朝の

東京　星野武夫

備へあり家べ地の蕪いよ〳〵青し

乾く石に腰かけ少女かたい柿をたべ

黃ばむ草をふみゆくに低い笹むら

いづれも電波兵器の部品けさ旋盤少し冷えて

家人ら當分火鉢を置かぬつもり一つ柚子あり

京都　川島南海城

芋畑芋の子があり木に葉がある山空の雲

朝山に仕へる母は母の氣持で萩咲き

父人馬を愛し地に斧があり枯笹がある

日々土の仕事があり太い梨の實のかたち

風吹く蜉蝣野に木が動いて太子廟十月

初後　杉村木々人

秋の日かまきりの青さ何としよう
女毛糸編んでその言ふことの遠い將來
地に梯を立てる霜柱くづれ
初雪なんど綺麗でず我等村落
一つの多日でどこも枯山で

札幌　近藤紫村

くるみの實二つ三つ握り草原走り來る子等
吾等も第一線胡桃の實地に青く
軍屬吾等日々山に對ひ秋の日
牛追ひに風吹き野の草枯るゝ
服身にそぐひ坦道ゆくに降る雪

山形　辻午子

あかざ赤く實となりし草なかにて話す
土くれ枯草つぎ〳〵の眷みんな知つてる人
水藻池べに寄りて鵜のみそぎの人ら
甲種合格なり勤報中なり芙蓉の中にて話す
室なか柿あり日暮れの煙入りくる

東京　後藤零丁子

辨當ぬくみしたしく道のべ露草の花
垣内菜をつむ母へはなしたく秋の日
子供すこし重たく抱へてゆく犬根畑のみち
柿の木柿の實を知つてゐる男お父さん
子供まゝごとの犬蓼のにほひするをかんじ

諏訪　山田不雪郎

霧の中で呼びあつてゐる歩いて來る
畑に大根が太る高い工場の垣根
地の面麥の芽が出たかちどきをあげる
刈田廣々草青ければ牛をつなぐ
男首突込んで水を呑む草が枯れてゐる

栃木　黒丸古生

諸供出する陽あたりの庭の諸の赤肌
潟に舟見えるかなた山見える冬そら
山茶花さく兵としての君と庭の井戸を汲み
古里にきて川蟹を燒くまつくろい杜が星夜
石のまろみなど山茶花咲いた窓あり

東京　福田思川子

そばの花が家の前山への道が上りに
秋の日へ整列す一心挺身隊の少女
闘魂多朝大根の葉を青く感ずる
樫の實を拾ふひるからの風が輕く地のうへ
垣に沿ふ一畝なれわが家の蕪は小さく

尼崎　林さあを

菱の實採る舟の波なし思ふ大き戰
菱の實一つ二つを喰ひものゝかげこの夜
皇土竹の春水なが れ巖を
月夜を戻るこどもらに朴葉をもちて
曼珠沙華を見る雨の日低き疊にすわり

京都　松宮磨研

笊に大粒な栗あり我らその夜を眠る
葱に培ひ葱青し山と山多めく
稻架のかげ稻扱機うごく一族動く
わが掌のしもかづき一本笠固し全し
工員肩をならべ霧しめりする朝を

新潟　中村亂水

大雨の中明り實の熟れし棗の木
水のべ牛が草喰つてをつてうごく野菊
家まへの地めん稻積んで來た車のわだち
板敷へ柿をごろ〳〵ころがして見れていつた人

諏訪　藤森澤瀉

山の池たひらなりつるもどきをとる
山は雪かぶる籾舟かへる
かりんをたべる兄弟ちいさいからだ寄せて
雲幾片葱畑霜柱くづれ

備中　田邊愛水

戰ひいちにち〳〵われらに冬菜畑ありて
いもの蔓葉を干しけふ家にあるなり
麥蒔き終る山畠いちまい〳〵ひろし
兵征く兵が征く柿の秋の家を後にし

秋田　足達矩水

御稜威にあり冬木幹々がみんな日向
多雲の厚さ油櫨みんな離れて高低
豆殻束ねつるし晩くからの月夜
つゝく戰果にあり落葉寄せるいくところ

越後　佐藤豁山人

晴れし日炭團握りしめる吾ら親子の掌
ちゝはゝの國の名を汚さじと云ふことを思ふ秋夜
少年ものを食ひ終り稻を運ぶ隊列
女の童蝗入るゝ袋を持ちあるは跣足

岡山　吉川規道

防空壕を掘りあげる柚子うれてある

朝の勤めの道のあかり蕎麥の花さき
朝霧たち龜島はずつとくづされてある
日々戰迫る工場けさも霜をふんで

東京　沼文生

秋海棠花さけりこどもたちの手の溫み
皇土護持のこゝろ女人木の實を拾ふ
こゝに植ゑし馬酔木實が生りて臺參
寮母にコスモスの花さきし花うごく〳〵

長野　半田雨衣

秋の日くるゝ山の木の幹みえず
ふさ〳〵粟の穗をきるを奉公この日
霜朝碧空太陽がはやい
戰果をおもふ霜朝木の葉うごかず

越後　須貝秀星

夜のすがた茄子畑と芋畑石塀のうち
かまきり水に浮きしゆるい流れ
山にてうめもどき色みせてゐるに近づく
月へ生蛙手に下げた目方

〇〇隊　富岡のぼる

駐屯部隊なりうごく炎天の雲なり
炎天戰車進擊す戰車が嚙む地の土厚し
兵征く北へ征く夏野の白い雲
淡々神兵夏野にめざめたり

濱松　口田朴也

南瓜汁今日とて朝のはらからの顔
暮れ沼の秋水にこの岸の小波
農人大きな足を伸ばし芒穗に風

芋の廣葉のあかるい水捨てる音　新潟　金子曙山

潟のみづ葭枯るゝに人の魚釣り

藜の花と山のみちあるがまゝに秋の日

濤音ばかり砂山低い木のうめもどき

楢の實が落つる空の深さを晝餉　名古屋　加々美絹子

稻のみのりを見る父に溝の水音たてゝ流れ

雨に打たるゝ溝べに咲いて野菊うすいろの花

榎落葉たまる日向をしつかりあるきわが子

柿の葉すつかり落ちた地がまだぬれてゐる　諏訪　宮坂岱風

芒穗が散る横臥の牛の胴體

兎が居る落葉の色枯草の色

歸還庭の柿落葉を踏む男

線路こゝに工夫が枯草を燒く霜に　京都　泉大畔

秋雲が走る地上屯の兵列を作り

湖邊をとぶ蝗遠くに砲聲のゆふべ

神風隊に合掌する稻乾く風ありて

稻束ねてどつしりと穗先土をはなれ　紀伊　吉川葦川

山の霧たち太陽のぼる山に聲なし

草の穗あり筏師はとびぐちをもてり

太刀魚を干しひろげたる穗芒あり

ぎんなん拾ひ走りゆく子が風中　秋田　佐藤禾黄

潟のなみ光り家のべ豆は打たぬまゝ積み

雲の下水ながれ芹田のみどりあり

爐べにてあたゝまり去るこどもらいとしく

老が腹あぶる夜の爐で騷がしい子供ら　濱松　永井はるを

山せまりくるおもひまつすぐ川を渡る

家を離れてのくらし芙蓉花さき

穗草こゝに子とつれ模型飛機をとばす

蟲なきしきるかわきつてゐる土へふる雨　佛印　梶田羊介

ひよろひよろ蔓草蔓風吹きてけふも

火焰樹蔭あるとき人屋上裸身

二つ三つ安南の言葉を云ひました葉はれて花のサロンに

土民困苦の膝がしらうしろに草食べる牛　岡山　笠原大能露

壁に影あり八つ手の花によりて立ち

朝日眼鏡にくる水仙のつぼみ

多の日土瓶の湯の土の味

地下足袋足に大きく田の稻の霜　〇〇隊　大澤蓬舍

秋の陽暑く照り厩にゐて馬のかたち

ゴムの葉枯葉もありけむりうすくかゝりし

山肌靄ありて身をつゝむに軍服

人が通る草の花は小さい黃色い花　長野　御所窪けさじ

人家ありて赤い實のこぼれたる山路にて

家なみいもほしてあるもう空が多來る

爐端に火をかき雨ふる外面見えて　　大分　田邊慶風

道に木の葉がころげ母の姿風ありて　　松山　今井四露史

防人ざくざく砂を踏んであるく夏の日　　會津　渡部湘雨

コスモスが枯れる白い鷺水にある　　秋田　渡邊碧山樓

矮鷄地を歩けば麥芽ぶく地しめり　　愛媛　菅木葉

秋の日默つて船人この船四國へゆく船　　栃木　大川しげる

しらしら雨夜街のどこかで見た林檎

畑に豆引く高く低く飛んで模型機

存分水流るゝ戰捷たしかにて茨の實

梅こぼれ葉肩に襟もとに圍ふ葱

ひまはいつまでも青き葉と青き實と雨中

父とし藁をつむ子供下にをりてもの云ふ

山の雨雲ともなつてくる笹に降る

山にまだ萱がある朝山にゆく車

溜池濁れる水に畦豆の枯葉浮く朝

稻田道の草しげりそこから一時に飛ぶ鳥

鷄舍狹くて秋日さし鉢の水飲む鷄ら

草の穗が立ち畦道あちこち草花の紫

柿の木に實の殘り坂をのぼり

稻田に學童居り稻が刈られゆるい雲

汗出づる山みち行くに落ちてゐる栗のいが

刈れて近い山々稔り田が刈られ

脈々木の根生きるくらやみのからだ壕の內

壕に入る自分十六夜月、あかり

茶の花が散り待避壕人去り

栗の穗を追はれた雀が遠くへ飛ばぬ栗畑

水ふんで來た水引草の花の溪隈　　岸和田　牧野秋風嶺

相撲取草干してある戶口にて少女

あちこち松林日が暮れるはつ茸一籠

實はならぬ南瓜の蔓曼珠沙華つぼみたり　　小田原　堀川屈人

秋の山泛ぶが如く朝海へ延びたり

山と秋空くぎりあり海岸から望む

山の方雲ありなまぬるき風吹き秋日

山の方諸畑へ行く秋海段々離れ　　岡山　山本光王

君が來る庭の樫の木の秋芽

朝戶をあける燕あれからこない

秋の日機械をさばき工員おほくを言はず

全艦出擊をきく秋夜星のまたゝき　　岡山　松本西平

せんぶり花あるを摘みとりし女

星あかりを來し稻架大きくある刈田

人去り線先萬兩の實色づくと見る夕

みかんひとつたべのこし机上冷ゆる　　福井　牧田雨煙樹

突然あまごとり溪からでてくる身をぬらし

ふごのあまごぶちありてひかり溪のいはかど
覗いたふごのあまごのぶちが眼にあり夜も
あまごとりがしづくの草鞋で山みちへ出てくる

西宮　高輪かつ子

父が戸口開けて來る一束青萱抱へて
わが菠薐草を蒔き蕪芽生える日夜
庭に十藥にまじり紫蘇が穗紫蘇
草原朝はぬれて野菊草に低う咲いて

上海　島津四十起

双物に觸れる親指の感じ秋晴れわたる
この流れ風誘はれて滿ち來る雁高し
アスファルト路ばかり踏む百舌鳥を聞かない
水牛の群街を行く足音もなく秋風

東京　岡本五郎

芒原湖尻への傾斜擲彈筒つかんで走る
海からの陽を背に松露を手にす二つ
胡麻日に爆ぜ草濕しみし手を洗ふ
地に霧おり曼珠沙華みな咲けり

大阪　淺野麗木

落葉音ありつづく地のおもてなり
いつぱいながれる河あかり冷えるちぎれ雲
由からしぐれくるを畔に藥塚あり
路のぼりきし人が呼吸す草の穗があり

秋田　木内柳陀

稻をあげる海から暴れてくる
この兒綿入短く着る此兒長男
車窓をあける栗かむ女の横顏
壹屋根かぜに多くる家

秋田　吉原東畝

芙蓉よごれてしづかなるからだ伸したり
どつちにもうらなり胡瓜で隣合ふてゐる
月の暈みる船は潮遠ざかつて征く
日が木槿の花が咲いた方へゆく

諏訪　武居泊雨川

草がもみぢしばらくは草の地をふむ
風が山から來もみぢの木の下の私達
人に鶏にげて落葉黄ろい
人居れば水あれば雲冷えて雲いろいろ
朝一ぴき鶏の顏草が枯れる

東京　龍田眞魚

ところ〴〵枯梗花咲き馬と並んで歩く兵にして
兵等夏草を踏む歸隊の歩調高原いま暮色
樵夫山にあれば無口にて椎茸汁を吸ふ
秋山が迫り少年默して使ふ山刀
飯場の一方は日向にて少年山葡萄を持ち來

兵庫　井口泥前

川風胴はらひやつく水面小じわひろごる
水面夕べの光なか〳〵退かず二百二十日前
背ろ夜寒の空がありこんな夜鴨が來る
無花果の葉いちやうにおちずあるこゝ二三日

清淨旭日清淨芒白穗清淨（神翼出發）

山形　爲本鉛人

蓼とれば蓼の實こぼれこぼれ居りし
秋晴れの土のしめり蓼の花は踏めず

數匹の小魚ときに光り藻草陰深し
某寺佛體におく光り初秋木の葉の色映え
栗の實がなり鐵材があり鐵に色あり

熱河　山村九十九

防空壕のまはりじやがの花しろしいとけなし
草もみぢする朝々野に家のまはりに
はつふゆ山のすがた村人みなたゝかふすがた
出征をおくる夕べコスモスの花とみえたり
もみぢする戰果に職場の陣頭にあり

東京　今井六石

多木幹々太く國土全し
空大いなり岩山の岩山の國多の來
神拜終へて空を仰ぐ〳〵霜地を來る
英靈そんな勿體ない吾兒の名一つ二つよぶ寒夜
河は逆潮滿々我ら闘士なり國の多夜明く

諏訪　山田蒲公英

一朝二朝霜が來た梅の葉と柿の葉青い
僕ら山への道霜柱が立ちて靴ひゞく
葛の葉枯れかゝる馬を徑へいれる
霧うごく稻架いくつか見えてくる
神機艦隊がうごく秋の日應ふべくわれら

東京　吉川金次

多がくる工場の貯水池に機械の音ひゞく
夕冷え若者汚れたからだ鍛冶屋場からくる
刻々血戰す職場の機械の前にゐる
どさ〳〵旋盤の切粉の俵を積む男達に多が來る
枯れた茄子畑にも祈る氣持爆裝機一機一機

○　井泉水選

東京　小川都影

霧の灯の明滅するは船のゆく會ひに來て夕餉の箸おく（送我子出征）
盃をさしあすは征く子みなとの夜のふえ
みなと明けてくると山のかたちが秋、それぞれの船
もう云ふことはない元氣で征つてきますといふ顏と宵月
いよいよ別れの、帽子を直してやるなど腰の圖嚢の重たげな

東京　岡野宵火

友の戰死の、そんな句もつて句會にきた
枯れて水はみづでながれる
ゆるされて、みづに灯つたやうな星を
美しいみづの、顏をうつせば山のあを空も
枯木のぬくとい影も許されたふたりになつたのです

沼津　内久根聖已

すゝやでもふとんほしてあるあたたかい雲
高い木の高い星昨日より遲い月が出る前
溜るとこぼす水の音が月夜いよいよあかるく
夕日まつかに秋が多になる火の見やぐら
草に音たてて降るので雨が多のあめ

東京　佐藤康治

葬もすんで芋の煮たのの殘つたの
月の明るいことを驛まで送り刈田の月夜家までもどり
川音の、屋根の上の石ころ古里晩秋
鳥ちかぢかときて空をむいては啼く古里なり

寺の大根畠の隅の菊が白いやがて雪のくるけしき

静岡　澤木正

病む身としてしみじみ聽く先生のお話あさの葉が散りけさの放送先生あとが音樂で陽さしぬくくなる

一機にて迅し昏れはやき空のくれるにて晴れつづく蕎麥の花このまま平熱がつづけばと思ふ

バケツの中のざりがに大きな鋏稻刈り始つてゐる

石川　片岡樹裏人

巢のなかくひなの卵あをそらがあると日がある

かげは唐箕がよくまわつてゐる壁いま月になる

あづき干せてゐると雨に居りてあづきを選る

ぐみが熟れとるぐみの木雨に明けてありぬ

稻の黃ばみたるより家々それよりのあをうみ

大阪　三浦香女

青葉に雨がさいさい降れば雨蛙ないてゐる

世のきびしさを秋夜しみじみ針に白い糸を

水引の花朝は朝露やがて日のさし

ジョーロの水が濡らします土から出てゐる芽です

爆音が秋にあるいつしん草刈る音である

滿洲　清水たかを

日和なら何ひとつ云ふこともない葱なら屋根に干しておく暮し

公園木の中もみぢした木もちらほら人の來る

暮れてしばらく藪かげのそれから月の葱ばたけの葱

刈りあげてとびゆくは鴉

あけたばかりの空にある星と青いままで落ちてくる葉

朝鮮　本多閑嶺

あたたかな木のはだ日なたの椅子木の葉がふる

空に月が海を照る多

風ふくとどの木も葉のちる夕日になつて公園です

水はあり砂はあり多木の影防空壕あり

黃ぎく白菊咲きて警報の中子供ら歸校してくる

東京　三浦清一

めざし燒くうちの古い火鉢の火にもどつてゐる

部屋の中めざし燒く煙にしてラヂオ盛んに演說してゐる

配給の青い鰊が三つあつて雪空ちらついてくる

松脂の匂ひ松葉の匂ひ朝日さしてくる

暮れる迄讀みコスモスの花白くまだ暮れないでゐる

長崎　森久樹男

とこやさんばりかんこどものあたまばかりで木の柿赤い

よるは疊のうへにおまつりで買ふてきた竹の玩具のへび

もずとり、けさはうすいきりのうんどうかいにゆくこども

芒塚は白い芒のトンネル口、峠の昔ここで別れた去來と卯七と

長家に住んであんまさん暮れて月がでるとでかける

東京　宇佐美一歩

弱いからだもち田舍のしづかさにきてゐる新聞

昏れてからのうなぎ針おろしてゆくろの音、秋

召されし身のかなかな朝になく神宮にまゐる

雨のあとの流れ雲が通つてゆく月の表情

月がひくくあつて芋の葉

平塚　龍山重三

木槿の花、空へ捧げてからは靜かに住んでをられる

ポストも海の見えるところに朝は葉の散るタバコ屋さん

みんなお國の子である朝は山のもみぢ體操をする（疎開學童）

からす、山の多に入る雙の翳陽がさしてゐる

みかんの葉の多も青い雨降つてゐる、海も

鳥取　井上有紀男

山にはや月がでても吾子のゐる家のまへ秋のやうす

板橋渡る影のうつるやうなので紅葉のちる

木の下に山羊に子供が來てゐる木の葉が散る

山に夕月の、枯枝ほきほき折つてをる母を離れずにをる

お客のせてはしつてゆく犬の賢しと思ふ、いねの花

福岡　津田笹彦

山のみかんを店に並べて海が白浪たてるほどに暖く

松林の中に紅葉するものも、池に病院がうつつてゐる

空の星のいろひと雨ふつたらしい町へ出てきて床屋の前

林の中に人がゐて林のよこ路がもう日のない夕べを通る

竹のてすりの橘と柳の落葉する喫茶店の中の兵隊

石川　高崎貞之

月のかやの中のかほのねむらうとする

かぼちやのつるにかぼちやひまの木にひま靜かな產院

水に咲く花のつめたいのみもの

稻塚に鳶が、沖まで晴れてゐる

わらびは酢をきつくして父とふたりの夕めし

横濱　東松八洲雄

月夜納屋の兎は白く寢てゐるしぐれの通る

月があかるく刈田、刈田の道があかるくて恩賜鄉倉

疎開のあとは四角に耕して青いもの月夜を通る

ひる月の秋ふかい父のふるさと木の橋わたる

月の出るとぱあつと明るくて刈田切り株

山形　佐藤逸仙子

命翌のことは、將棋さす程は月缺けてゐる（中支にて）

星月夜の潮みちてくる運河に沿ふてゐる道

星夜の電流が凍るやうな空間を振動してゐる

風に散る葉の海に散る波の穗の遠く日の入る（父死す二）

母が手造りの草鞋も歸らぬ旅へ穿かせまゐらす

高松　大山多石

厄日の風がすこしはあつてわつさり稻の穗

桑が青葉になりきつたあめ

ふるさとは秋ふるあめのみのかさで通る

うちよりそとがぬくくてうちでねてゐる子よ

ふるさとこれから寒くなる刈田のからすで

栃木　日向野千一路

遺書は書いておく妻に手をひかれた子の、梅咲く

風やんだ夜の星が出てゐる家、御遺族

癒えるとなれば秋のきいろい花にきいろいてふがきてゐる

この子も通年動員のリュックサックで秋のてふ

ず、つぶり降つて稻の穗一羽はゆく

伊豆　佐藤專子

よかぜいつそう來ては泊り

たわわに柿が、牛が出してあつてなく

紫苑つゆけく朝の水の流れてゆく

多日ぬくぬくとさして二宮先生、持つてゐる本

たかだか烏瓜の色の日暮は寒いわらんべたち

熊本　木庭皓龍子

赤い日が出ると蜘蛛が巢を張ると警報發令中

ぬれてゐる葉が散る櫻の樹のある交番

お芋の配給がある入營兵がゆく私は登校する

樹を倒してからの木の匂も、勤勞奉仕

やがて征くとは思ひ靜かに讀む灯が更けてゐる秋　東京　村田白鵜

富士の見える渡し場で工場が退けて來る蘆の葭切
鵜とは見えて秋の立つ波が白いなみま
小村をすぎる時のばらの色が山へ行く道
飛魚も月夜であるデッキテーブルの煙草の火
瀬の音、向ひあうてたまたま釣れてゐる　東京　落窪京太郎

幾度か迎へ今日も八日の多木の富士かな
幼い日のその凧が父の奥津城の山の上にも
元日故郷の事少し語り暮れて居り樂し
子供に見せて朝は朝日の建國體操　駐〇〇　上野忠三

こんなに炎のある父のもう六十一の背を流す
蒔いて芽の出て延びてゆく芽のあさあさ親子でゐる
注射にも慣れ八ッ手の花の白い看護婦さんにも慣れ
並んで看護婦さん日向の飛行雲の大きな半圓
こんな所羅宇屋さんの笛の疎開の家跡　濱松　細谷野落

彼岸がくるとひがんばなさく默々勤勞
かやつり草かやにして村の子ども疎開の子供
石垣昔のままにもみぢ濠の水司令部
南瓜粥などいただいてからこんばん常會
竹馬の子は去んで短日石蹴りの子暮れかかる　仙臺　蘆立陶抄子

牛の角がどしやぶりのあめ
冬の、山からでた虹のしたの山々道は一本
ぱつちりと夕べの星子供は家でご飯たべてゐる
鴨なければもう雪のくる家々の白壁
燦らきら星が生きてておくれ　東京　角田重信

殘置燈から白い雪をふらしてゐる
ひとりさめてゐるいつぴきないてゐる、秋
こちらは青い麥の日ぐれ道、歩いてゆく
むかふ朝日が射して石橋のみえる道に出る此の道
青い空、切り張りのしろい秋かな　東京　平松星童

つきよつめたくりんごにほふてゐる
電氣爐のほのほ透明な秋の陽さし入つてゐる
はなし聲坂おりてゆき月がガスになつてゐる
霜の朝日が銃器庫の大きなカギである
月のあかるい晩ほどさむい寒さが池の今晩　馬山　山本木天蓼

豐穰猫も草の實つけてもどつてゐる
三日月、山のぬくい溫泉が秋で
父が刈る稻に稻刈りかさねその子
霧に日がにじんでくるおんどりめんどり
ざるに入れて輕し供出殘りの繭白し　福岡　武鑓青杏子

三機音たかくこのごろふるさとの石榴うれます
公園は時雨の松の木の枝々のそこのラヂオ
朝は誓ひを誓ひ多になる木々四列になる
雨になり花屋さんの花が菊ばかりすこし濕れる

午後は霽れて公園の松の木ここも畑にする　栃木　日向野秀策

背中に月夜あきらかに遠山いただきの雪
舟に鵜をおくしづく日のつまつた日のくれ
沼の雲のひととところ夕焼牛渡していく
丘が保健所の建物とコスモス白い雲が通る
岐れ道のみちしるべ三角畑の麥の芽雨ふる

下關　淺井冠二

星が多ちかい海峡の口まいばん
秋の日が水の底の石ふるさと
夜へマッチ消えたぎり、浪音
午後のとある町に船がつく船のふえ秋
暮れるとくらい港の町どほりの木にも降る

明石　三好叢一路

風呂敷に包めてそんな小さな佛檀買うてきた夜る
秋と、母の古い鏡臺の元結ひや油つぼなど
芋畠や靜かな農事試驗場の日の丸や稻田整然
この秋の菊花展などもあつて町が見下ろせてゐる
秋のあめあがり水桶に採つてきてある花

横濱　青木菁華

雞木山の雨の秋はもう昏れてくる炭燒く煙り
もう灯を入れて外は明るくまだ咲くコスモス
雨晴れて朝の松山の松雞木山の雞木もみぢ
照ると其影もくつきりとむべの實の色づくころ
稻を架けつらねまだ刈らぬ田もある櫻堤櫻もみぢ

東京　木村乙羊

秋は雞木林のたべゐる牛の貌が夕やけ
工場地帶むすめさんらしくて通るむすめさん四五人
岩にからみつく藻であるよせてはかへす秋の浪である
草原露ひかり朝銀翼日をうけてゆく
柿の葉赤くなれば柿の實が空庭には干してある

松山　村瀨汀火骨

ふねのふえ稻田刈るばかりの夕日にて
子供お祭り下駄橋のむかふの工場のけむり
お墓は四國山脈の白雲と稻の稔りの中（朱鱗洞忌）
右がいつか左になる川の稔りゆたかな田に沿ふ道
藤は伸び垂れて風がつるが月となるころ

弘前　竹內竹童

雨が雪になる配給の薪が暮れてゐる
月朗々と空の大戰果くりかへしてゐる
冬は障子の穴から年寄り針穴通してゐる
山茶花咲かせたりして時雨の中の湯けむり
屋根の上に杉山の杉だんだんはれてかつこう

横濱　小林不惜

甘露水とて杉に雨上つてゐる雫してゐる
日々好日と書いて新聞受門に柿うれてゐる
綿蟲夕べはすこし冷ゆる程にひいらぎの咲く
工場の露地晝休みは八ツ手の花羽根の音など
百舌鳥が柿の木にゐて朝早いかまどのくち

愛媛　佐伯美則

秋が澄みきつて澄みきつて私とおないどしの君神である
稻を野積して海は入日の船が笛ならして通る
待つのに持つてふところの本、草の花水流れてゐる
風が池の堤の枯草葬の鉦が通る

日ざしあたたかくして雑草の中の一輪の秋　愛知　田島素琴

山茶花朝日さして父さん母さん頂きます（疎開學園）　群馬　鹽崎寸南夫

晴れて風寒い廣幅薄播といふ麥の芽　傘もつて出たものの一日スコスコが晴れさうけふは晴れてもずの鳴く障子の切りばり

隣陸一機二機三機赤城なだらかな山容もみづり　しとしとふつてまだふる雨の百舌鳥の聲が日暮れる

刈田の電線の音譜のやうな移りゆく三機　病ひすこしよくて稻の花そこら出あるく

家がある柿の木がある上ると稻架がある棚田になる　福岡　井形春一

南瓜が雄花ばかりこのごろうるさいことばかり　雨の日も春、育つた家のことなどもこんな日

松の青さ海の青さしやんしやん馬が鈴ならしてくる　廬がいろづいてくる藁屋柿の實若い兵隊が通る

家のまへ苗代田朝は牛がかげしてゆく　柿と栗と色のよろしきを供へ征きし人に

月夜の峠こえてゆく栗の花にほふてゐる　福岡　原實

釜山　田中登喜枝　いつもの道のあかごの泣聲今朝は寒くて、通る

なんとしても降らない井の底の空　藁塚に雨がふつてゐる窓あけて隣も

井戸に顔映るもふるさとの朝かな（古里三句）　大阪　南川鴻亮

あさ、土からいただいて膳にする　朝の寒さが稻扱車のぬくい晝となつて

幼い日のさるすべりの花あなたの子がまごごしてゐる　ミカン色づくころの銀翼を仰ぐにしづ心

但馬　岡田琅玕　木槿の白は美しい學校のオルガン

齒科醫の口腔圖と世界地圖には日がさしてゐて秋　銑子　名雪理輝

くすり箱からくすりを毎晩指のくろいくすりを　くらさこぎいでて月が雲を出てくるこんろの口

遠い昔も日は出頃の城山、こんばん仲秋　日のかげると山の蔭風ふけばつぎく

山に山のかげ道にわたしのかげ長う戻る　草がいつぱい花つけて水が流れてゐる夕べ

兵庫　金平二火　夕月水に蘆のゆれて影

山のかげがもう秋の夕陽となり山の學校　熊本　鹿谷皓樹

すつきり山に朝日がもう秋の、畠の菜ッ葉　梅はまだ蕾の足袋は裏返しに干してある

石灰山と家根に南瓜載せてある鮮人部落と日の暮　つきよのくらげが浮いとる

一齊に芽を出して少し歪んでゐる畝で朝日　お巡りさんと鶏と山にあめのあがつたところ

町のポストが四ッ角にあつてまいにちあめ

吳　飯田露草

とんぼう、峠の覓など秋めく

海から明けて青い山が坐つてゐる空襲解除
むかし私も掃除した此のランプの明るしとおもふもふるさと
いちじく笑み割れて雨止んでゐるこどもたち
東京　三輪　薫

戰車がとほりそれからまた落葉をひろふ子供
野いばらの實、坂道波がきこえる
バスの窓からひるの海がみえて秋、みえなくなる
崖のつはの花、はれて流れてゐる水
東京　木村飛泉子

驛は高みに、柿と白壁と村がお祭り
雀飛びたつ道が田の中富士は初雪
女子挺身隊白い腕章霜の落葉歩調とる
陽の明るさ菊のひとはなはてのひらにおく
熊本　石原元寛

龍の目白に目白がくる山茶花には小蜂きてゐる
夕べ屋根がぬれてゐる煙出しの煙
屋根石の落葉に日のさして落葉する
三重　小松途從

稔りて明るし靜かにかかる雨日ぐれ
夕日になつて屋根の雀夕めしにする
ここも紅葉は見頃のお茶だけはあるといふ茶屋が一軒
平壤加藤運兒

雪空、武裝兵を乘せてから乘る
井戸端には白菜の白さの高々度に敵機を
煙突へ朝日さすはたらく影になる
東京　宇賀周央

爆音それは味方機の爆音秋空ふかく
空襲無事である月夜の東京を歸る
敵機が殘した飛行雲であるうすれゆく
但馬　高本三蕗

おしまひの一たばはざにかけて、月
霧がはれると刈田のしよんぼりかがし
草はむ仔牛とねそべつて親牛と麥の芽
東京　夏堀望子

芋づる干して葉もくきもむだはないといふ日和
空澄みし日の松が枝も今日は松にふる雨
ぬいてきて菜を洗ふ水の空のいろ流れてゐる
岡山　近藤次良

一本の白いまつすぐな大きな大根ぬいて戻る
たよりのこない空となつてからの空が葉のふる
迎へにきて橋を渡つてそこで風が松に吹いてゐる
東京　伊澤元美

飛行機雲美しう勤勞學徒日々好晴
學徒宣誓文を讀む決意靜かにも秋雨（工場入所式）
霧に月がほの明るくて屋根の線
信濃　關口江畔

石も枯れて茶の花咲いてゐる
三日月淺間をうしろに麥蒔いてゐる
雨がまるい輪になる水のしづかな橋をわたる
長崎　長山林二

藪こうじにも日のさしてきて竹林一ぱくする
貯水池を掘りにスコップ持つて秋がはれてゐる山
土はこぶもつこうの重さも秋の靜かな海のいろ
松山　高橋一洵

月夜の月がなくて本買うてもどる　　栃木　栃本よし雄

機織る音の雲ういて草の穂ゆれてゐる　　平塚　青木美岐雄

杉の實がおちてゐるせんぐわんと流れてゐる　　但馬　安積行露

それから汽車が鬼怒川の夏山々連りでくる　　静岡　遠藤源治

夕べ、小高い方へ道があつて枯れつくしてゐる　　静岡　平岡國次郎

あらしのあとの奉戴日の旗でそばの白い花で　　栃木　植田市龍

稻の穗、日の落ちぎはの明るい道を戻る　　長岡　小原甲陵

山羊が鳴いて日暮となり雨になりさうな　　大阪　大西八紘子

流れの底の落葉に降る　　岐阜　水谷青杜

松の葉にふり石にふり雨の春になる　　栃木　栃本よし雄

ことしの土筆が枕もと潮のくる頃のぼんぼん舟が音する　　栃木　栃本よし雄

雪のきえた雨のあがれば枯木ゆふ空　　静岡　遠藤源治

萩の花・や下に町が見えてであかるく雨のふる　　静岡　遠藤源治

まひる蟻があるいてる芭蕉の廣葉の影しづかな　　富山　高橋政二

芭蕉のイガと何か編む看護婦さん午後の日ざし　　富山　高橋政二

地の底ふかく飯はほの白く其をかむみんな（石炭掘身隊）　　川越　横關碧樓

夕立見るまに山から降りくる驛の木柵　　川越　横關碧樓

秋のまだ青い銀杏の夕べとなる空の雲　　函館　並木緑朗

つゆでつゆらしい雨栗のさかりと見て通る　　函館　並木緑朗

洗ふて大根の白さもう雪も來よう　　長野　高橋松二

英靈迎ふる灯も枯木の中にあちこちある灯も　　長野　高橋松二

稻田の刈りあと月夜となり土藏の白壁　　京都　荻原荻

戰地へのはがきが戻つてきて諸は切干し薄日　　京都　荻原荻

やなぎとさくらのきのはしおちば　　長岡　山岸稻青

若い衆はだか馬から見おろしてゆく菊のつぼみ　　長岡　山岸稻青

朝の體操晝の體操そして工場地帶草が穗になる　　濱松　小川寸佳

水音萩の花すごしこぼれ来をとぐ　　濱松　小川寸佳

ラヂオは吹きます尺八の、戰ふ音子はいづこ

仲秋の月なれ海のよな空へ光芒のいくすぢ

地に蟻の一つ二つゐて夏の朝は清浄　但馬　平位青水

曖い雲が浮いてゐる木守の柿が警報の中　山形　齋藤てつ人

橋のあつて山の紅葉日が入ると月が出る　横須賀　渡邊六、平太

やまびこして汽車の音、稔田のシグナルおりてゐる　東京　小田島義

乳羊ましろなるくさむらの夏が秋となり　秋田　増村辰郎

めづらしく鉦たたきいて家はいつも親子三人　長野　大田鐵石

海が青くて黒塀長い海軍官舎は落葉　大阪　阪部蝶三

岬見ゆるまで徑があるに行くに落葉　熊本　白石默忍

山も川も月になつて小屋から道の續けるを　島根　佐々木行人

月夜流れては淀みては流れゆく　石川　大平成正

ふゆそら煙突の煙が風に千切れるいよいよ決戰　福島　萩原アツ

ことし雨の多い山茶花は夥しいお客が今日　諏訪　今井默天

咲きつくして枯れつくしてあたたかし　並み居つゝすすき戸の明日雨にも

窓から牛が顔だしてまだ暮れぬ秋の青い空　粟重たげな坂空近い牛と小童

月夜の向ふの島から漕いで來た舟か　竹ばかり宇禮といふ芭蕉實を見せて（三河）

時雨の月が出てゐて大根夜にて白し　胸ぢ秋のごと道のべ野花かげ添ふ

裸になつた木のそばでうれてゐる柿　山の端づらふ陽のくれをうるし葉みごと

松葉おちて少しぬれてゐる道とほる　父と子がたまに會ひ夕餉の話がとぎれる（富岡行）

長崎　小西佛舍利　めぐり逢はん日を約した芒の枯れやう

○　卍禪子選

稻刈る音のどの田も女ばつかり今さらながら　新潟　大橋鏡作

山みちひとり蕎麥は花つけて紅い莖

疎開兒の登校に朝な逢ふ歌ごゑ列なして

散るは木の葉煙うつ雨の家路暗らく

月の夜の貨車のとゞろき想ひはてしなき

たそがれうすもやのほぢもみぢや

下弦の月に木が葉をふらすので

暗くて踏む音の製繩機空いつぱいの星

柿うれたるより月晴れ渡り木工場の夜業

黄菊咲き亂る村の子の萬歳（明治節）　飯塚　高取　芳春

落穂拾ふ學童に夕日が沈みすぎる　森谷　乙山

いつまでも花がある秋いつぱいの風をもとめて

すきな秋が身にしみる雀啼きつゞけ單純なしづまり

藻にゆれて秋小魚もつと大きなものにいきているやうだ

三島風吹け〳〵今日はしつくり椋鳥をも見た　相馬　翠

讀經日暮の海が鳴り出し

母の忌やつぱり太陽は海に落ちた

子の寢顏見つめてゐる蟲の世界

栗拾ひ眞晝は風が欲しい　横須賀　朝倉　登代子

身延への終電車ですよ旅寢ねつけね又襖越しの話（富士宮へ）

昨夜曇りゐし窓に富士山床ぬちに見いで

晴れこぼれ野菊露けし富士はまともの道を

新茶賣る店あり葉鷄頭は流れに近く　横濱　佐藤　鳴風子

雪解けたんたんたん灸すえさせてる

掌吸殻ころがし藥の雪沓暖爐にあたり

郵便きてる門の受箱にも入つてゐた雪

雪へ口開いて子供等風の子　花巻　加賀谷　宏

山にくらし秋のはしきあさあさわが家

石、水のそこまで澄んでゐる

雪がちらついてくれてしまふ水溜りの石

肩に雪かかるマスクをかける　硬炭山も町も指呼の嶺せんぶり採りそろへ

爆音それと聞きつゝも掴る諸への力

絶間なき輸送の轟音遠のいて蟲の音

濱の草も船も色のないこの頃　東京　吉沼　晴穂

秋風新しい人生觀を見出る

病めば落葉に眼を閉ぢる冷たさ

一粒〳〵配給の豆で多を耐えてみたい

現實一本の草は陽に起きようともせず　照井　稗人

これが北上川の辨慶立往生のところ落花渦まく

青あらしはむかしからの石段のぼれば疲れてゐる

朝光堂のあたり風吹いたりやんだり蝶々

摩訶般若となへる朝を空むいてもくれん　東京　奥村　そのえ

畑にほんのり霜の來て錬成の靴音走る

公孫樹はらりほろり今も神兵戰ひまさん

山茶花音なく散るを日は別れて行つた

菊とりどり咲くが中に親子ほつりと灯し　熊本　園木　六食子

つやゝ蒸物配膳の中ふたつ陰膳

けふきりの査閲豫行ぞ精かぎり四十八人隊

雨となることしこの午後農道修理の女班

慰問うれしいその屯する萱原裸體學徒　名古屋　鈴木　梅宇人

土肌百舌鳥のなき陶窯のある丘

柿をくひちらし山靜かなり

椿風寒いあれが築港であるらし　常春の三河伊良湖岬にて　横須賀　新倉三之介

行けと竹藪で椿の葉に花に　濱松　久野仙雨

空や雲や松まあちこち疎開の子ども

犬抱いて行く子よナ朝の枯野一つ家　大阪　英吉更

人のことわがことに更け灯照らふ多夜

吾が窓は煩照ら旭雀鳴くこゑ

禪寺の白萩のこぼれ易きを音づるる　奈良　小野暮仙

京街道は家々屋根に紅葉ちりつみ

疎開した子とつれだちは紅葉の丘の邊を

とつ流星南にまたいねずか戎衣を縫ふや（P夫人）

磯香のなかの大根畑々丘越える　群馬　佐藤厚吉

土砂降る一人居の火鉢小さき火のあり

夜業終へて歸る途のあかときはしみじみとしたあかとき

中學生勤勞奉仕、大人になつて鍬もつて默し

純朴な百姓の叱言で氣持よい麥播き　中支　深澤夜舟

ひよこに手をさしのべる炎天の木かげ

馬よ斷け高粱はろか國旗押し進む

銃聲全くない月でどこまでも大きな高粱　四日市　川津一之

芋煮ゆるたのし入營をよろこびて煮る

熔接のカーバイト糟白うはだかり秋くさ

トーチカ吹かれ山なだら草々の霜　横須賀　新倉三之介

一食米の幾ぐ袋富士の大きな町を肩に鞄し

目につく柿のくれなゐと驛々征くはみな紅顏兒

ふるさとは雉の實の叔父叔母や今おやつの話題　伊那　中山百姓

霜つれ葉笑む聲に土からの赤い大甘藷（臺灣沖海戰）

槍穗に一葉忍ぬと聞く朝クツキリと桐

氣忙はし秋の曇り射す道御國山蕎麥　福岡　南畝三坡

神話の生太刀生弓矢敍々の砲戰橋上の月

寢起のよい兒素直にちやん〳〵こ

しぐれ廣前征くか短劍なれど祖父の記念　〇〇隊　渡邊舒生

きれいに散つた落葉ふんで朝陣地へゆく

朝に落葉ふむ靴のかろく生活のたのし　東京　渡邊如闇

大戰果うれしく天の川しるきをあるく

吃るので好きと云ふ言葉も胸に鷄頭火と燃え　池上可考

風の音泌ゆ深い空繪葉書を出す

退院の挨拶に廻つて來た明るい顏で一、一、秋晴

指針を記す（四）

中塚一碧樓

暑き日起重機で馬を下すなんぼでも下りてくる馬　富岡のぼる

これは○○隊にあつて奮戰をつゞけてゐる勇士の一句。起重機で下りてくる馬のかたちを思ふだけでも、もう愉快であるが、なんぼでも下りてくる馬であつては更に愉快である。然し之は單に愉快であるといふに止まらず、それらの馬に云ひしれぬ親しさを覺え、或る頼もしさを感じて歡びに充ちてゐる作者である事が思へる。馬に對して作者が持つてゐる愛情が「なんぼでも下りて來る馬」といふ表現によつて鮮かに叙されてゐる。

「暑き日」といふのも至つて素直に云はれて却つて迫力を持つてゐるやうである。

西瓜畑にして西瓜をかろく叩く我れ　沼文生

微笑を感じる一句である。「西瓜をかろく叩く我れ」は如何にもをかしく、蓋しこの人は好人物であり或ひは好々爺であらう事さへ思はれる。

人の世のをかしみ、にんげんのをかしみといふやうなものも、人の世に、にんげんたちに必ずなくてはならない心持であつて、これによつて世を明るくし、人を元氣づける事に大いに役立つ事は今更云ふまでもない事である。決戰の最中にあつては斯うした心持に觸れる事は有難く、僕等の持つ幸福の一つでもある。

その新盆の二英靈が浴衣をたゝむ一一　今井六石

作者の長男次男は先般相次いで○○方面に於て名譽の戰死を遂げられたのである。今その新盆をむかへられて息子さんの浴衣を丁寧に一一たゝんでゐられる。その浴衣の一枚一枚の柄にもその手ざはりにもまざ〳〵と息子さんを感じられてゐるであらう親御の胸中は誠にいかばかりであらうか。「浴衣をたゝむ一一」の「一一」によつて親御の切なる情が虔しく表はされてゐる。作者は更に「闘志男」として皆胸板を汗にし」のごとき句を作してゐる。僕ら亦復仇の闘志燃ゆる。僕らは皆誰もが、此句のやうに胸板を汗にして力一ぱいに戰ふべきである。

新鮮な馬鈴薯豐かに戰ふ日本獨逸　服部竹映

愉快な一句である。必勝日本であり、必勝獨逸であり、新鮮なる馬

鈴蟲豐富にして樞軸軍の勝利必定である。句の表現から云ふと、「新鮮」と云ひ「豐かに」といふ言葉づかひについて一寸考へられるのであるが此場合「新鮮」といふ言葉も案外にこなれてをり又「豐かに」といふあらはな言葉もそれほどの障りを持たないやうである。「日本獨逸」と云ふ心持についても考へて見たのであるが、之は日本だけであつても物足りない一句となるやうであり、獨逸だけでは無論句をなさない。やはり此句の通りに「日本獨逸」といふべきであらう。或ひは一句の成立ちといふやうなものはこの「日本獨逸」にあるのかもしれない。

防空服裝身につきて夏曉で起つ　石野美沙緒

一句の實質さに賛成し、一句によつて示すもの靜かなる勇氣をいゝと思ふ。「防空服裝身につきて」の表現は平常の言葉つきのまゝに實によく云はれてをり、すぐれた表現といふべきであらう。「夏曉で起つ」には多少ナマな感じを持つのであるが、この多少ナマであるところが一句が生き〳〵としてゐる因も爲してゐるやうであつて、かうした所を一概に字句の事ばかりは云へないと思ふ。青年らしい氣持であつて、好ましい一句である。

岩はなの草・の夏果つ　親井牽牛花

誰かが「思ひ入るべし」といふ事をよく云つてゐたが、こゝまで思ひ入る事はなか〳〵であつて、作者の修行のほども思へるやうな句である。いかにも地味な心持をいかにも地道に表現されてあつて共鳴を感じる。

此作者この欄の五句みな短律であつて、其中の一二は或ひは氣抜けしてゐると思はれるものもあつたが一體に面白い作と思つた。此句に次いで「海すでに秋のうみどり」も澄み切つた心持の佳句と云ふべきであらう。

秋夜を覺めて輕機分解の手順追ふ男　齋藤達也

作者はいま宮城療養所に病を養つてゐられる白衣の一勇士である。秋夜に目が覺めた時、作者の思ふことは實に「輕機分解の手順」これなのである。僕は此句に接した時ハッと胸を打たれたのであつた。この心はものゝふの心であり誠に敬ふべく自然と頭の下るを覺える。「分解の手順追ふ」によつてその思ふ事がいかにも躍如として明かに表はされてゐる。

このひたぶるなる心持こそ皇軍の强さであり日本の力であるとも云へよう。「秋の夜目覺めた時などお前はどのやうな事を考へるか」と僕は僕自身に訊いて見たい氣がする。重ねて「お前ははつきりと返答出來るか否か」と訊いて見たいと思ふ。弱々しい事、小さい私事などつまらない事々を思ふやうな輩はこの作者の心境に對して正に慚死すべきである。

句評

米倉勇美、長屋青橙、秋山秋紅蓼

夕燒夕燒蜩は陽をちぢめる（晴穂）

【勇美】率直大膽な表現「蜩が陽をちぢめる」なんて、如何にも詩人らしい、佳句である。

【青橙】蜩の聲には誰もが誘はれるやうな氣がするのではあるが、作者の受けた感じ其儘の此句のやうにも思へない、「そんな感じも有る」と云ふ程の贅意を持つ、「夕燒」の重ねは叙情味が有りすぎる様な氣がする。

【秋紅蓼】「陽をちぢめる」は少々無理な言葉とは思ふが、作者の表現しやうとした感じを或程度とらへてゐる。たゞ、夕燒夕燒と重ねた上に、陽をちぢめるでは、却つて感じが弱められ作者が叫んでゐるほどに言葉が生きて來ないやうだ。又、蜩は陽をと擬人法的に感じられる表現も損である。

波條　夕冴えぼんの盆唄監視船ある（雨煙）

【勇美】細かな觀察、行き屆いた表現、而も十分作者も、ぼんの盆唄歌ふ濱の人々も——狀景が——時局を認識して、時局の、時代の上に起つてゐる。只だ結句の「ある」は「居る」としたら如何だらう？何れにしろ此の作者のがつちりした眼がうれしい。

【青橙】放膽と云ふか、荒削りと云ふか、然して一句の混亂を起さしめず。されど、對象が一つになるまでの昂揚と云ふものを持ちたい。單なる叫びの様にも考へられる節がないでもない。

【秋紅蓼】主知的によくみてゐる作ではある。それに、波條と監視船といふ言葉の照應にも、その言葉の感覺を通じて時代の認識を見る。だが、波條夕冴えといふ表現には、なぜか動いてゐるところがない。主知的な態度から來る此種の表現の缺點である。

陸稻とこのあたりの家がかぐはしき日ざし（自由也）

【勇美】狀景浮むべし。作者の自適さ、自然への觀入も窺はれて、まこと「かぐはしき日ざし」ではある。がそれ以上の迫力は感じられない。尚ほ「と」の説明はむしろ不要ではなかつたらうか？

【青橙】穏やかな句境であり、平易な調子の一句である。然し一讀後に徹つて來る力が甚だ稀薄だ。陸稻」と「家」とは渾然と「かぐはしき日ざし」へ溶け込むべきであるのに、對象的に響くのみである。手際よく表現されてはゐるが、眼から受けた感銘に止まつてゐる様な氣がする。「このあたりぜんたい」がと云ふ想ひを表現すべきであらう。

【秋紅蓼】この句では、「かぐはしき」といふ言葉に、一句の感情をこめてゐる。それだけにこのかぐはしきといふ言葉が、この句の場合ほんとうに生きてゐるか否かに問題がかゝつてゐる。作者が感激してゐるほどに、表現として生き生きとしてゐるかどうか。私達が青いといふ言葉白いといふ言葉を使用しても、ほんとうに青さ白さを表現する

といふことの至難を感ずるやうに、私には、どうも言葉だけのもののやうに感じられてならない。それに、このあたりが少し調子がたるんでゐるやうだ。

秋といつてもまだ團扇がいる兵隊さん皿のいり豆　（笹彦）

【勇美】素直な句である。正直な句である。

【青檠】一氣にぐんぐん言はれたところ好ましい。全體から享ける感じも明るい。下半は一見粗雑な置き方のやうだが、斯うした語音も此場合の上半に對して成功してゐる。

【秋紅蓼】平常の言葉で、よく情景をとらへてゐる。かうした句の内容は、連句などにも發展するところのものを持つてゐるやうだ。また、さうした内容を一句のうちに表現し得てゐるのもこの句の特徴で、こんなところにも案外俳句の本質的のものが潜んでゐるのではないか。

兵に子らに泳ぐ川ありて緩流　（鶯郎）

【勇美】一日歸郷の兵と子らと、まことにぴつたりした戰時下日本農村の麗しい貌である。「兵に子らに」の表現もうまいし、結局「緩流」もよく利いてゐる。然し聊か作者が傍觀してゐる恨みを感じる。句が弱いのである。「川ありて」あたり難はないか？

【青檠】見馴れた句の型であるが、純正な句の心を貫ふ。「緩流」と水を再び置いた確かさには敬意を表したい。練達の妙境とも云ふべき一句である。

【秋紅蓼】かういふ表現には、張りきつたものが要求される。つまり讀みきつたところに大いた飛躍がなくてはだめだ。作者の藏してゐる感情がスプリングのやうに彈力性を持つてゐなくてはだめだ。定型句に於ける表現と同一のものを要求される譯だが、この句では「泳ぐ川ありて」に力をみせてはゐるが、緩流といふ言葉が充分に働いてゐないうらみがある。

青年きみの疵一つないからだしづかに海が夏の盛り　（叢一郎）

【勇美】相當年輩者が激刺たる青年（肉身でもあらうか？）と眞夏の海に恍惚と、而も一種の羨望を以つて對してゐる姿、茲に時代の動き、一つの波をみる。

【青檠】この句の境地には贊成するが、原句の表現では青年の逞しい立派な軀と云ふより、柔弱といふものさへ覺えるのである。一句が順序的に叙せられてゐる爲たらうか、又或る程度は一句の緊りと云ふものも考へるべきである。「しづかに」は此場合必然性が有るだらうか、殊に此句の樣な叙法の場合に於て「しづか」には反つて間伸びを覺えるのである。

【秋紅蓼】この句の持つ强みは、青年のやうに若々しいリズムから來る新鮮さである。一ト息に讀了するときにふつくらするものを感じる。この感覺をもつと端的に表現することを望む者もあると思ふが、それは、この表現でこそこの感じが出るのだとも云へる。ここで、調子とかリズムの强弱のことを考へたいのだが、語音の數が多ければ弱くなる少なければ强くなるといふことの外に、その言葉が表現として生きて使用されてゐるか否かゞ大切で、つまり語音の數でなく質に大切のものがある譯だ。だが、全く別の表現でこの感じを内容的に持つことは不可能ではないと思ふ。

開目抄（四）

荻原井泉水

外の灯が昏れないうちの海に一と雨

近木黎々火

墨一色の繪のやうな淡々たる手法の中に一點一劃もゆるがせにしない心法がある。この心法は作者としては嚴しさであるが、これを味ふ者にとつては寛がしさである。いかにもらく〳〵と畫いてある繪を見て、たゞ「いゝなア」と思ふ、微笑である。だが、これを畫いた方では、決してさらさらとやつてのけたものではなく、幾度か想を練り、幾度書き損じたものかも解らない、でも、さうした苦澁の跡を見せないで、初めからら〳〵とかいたやうに味はせる。作者とても亦、苦勞した後にホッと出來上つた喜びとしての微笑がある。これは凡ての藝道に通ずるものゝ、殊に俳句の如く、作者と鑑賞者とが同列である藝道に於て、一さうはつきりと感じられる。それが俳句道の身上だとも云へよう。句を作る者は先づ此事を心得るべきである。以前、一時、句作の苦しみを誇りとして、その苦しみを吐き出したやうな句が多かつた時代もあり、又、技巧といふことを勘違ひして、むざうさに投げ出すことを以て能事とした時代もあつたが、何れも、句作道を以て修業道とする我等の取らざる所である。

家々のかたち灯がともつてからの汽車でゆく

津田笹彦

前の句と似たる取材であるが、その味はがらりと違ふ。前の句は明るくて、重厚である。此の句は美くしくて、輕妙である。その輕妙さは、「家々のかたち」の「かたち」と書いた表現のうまさにもある。日はとつぷり暮れてゐるのだが、家のかたちが影繪のやうにそれ〴〵に、くつきりと輪廓されてゐる。其の中に黃いろい灯がドボリ〳〵と點じてゐるのだ。少佐の繪册子に、よゝ斯ういふ繪がある。私達が幼い頃には切籠燈籠や廻り燈籠によく斯ういふ「家のかたち」が浮き出てゐたものである。さう思ふと、お伽の國のやうなほゝましさも感じられて、「汽車でゆく」といふ氣持も、朗かに思はれる。車内もすきずきとして、ゆつくり腰をおろして、靜かに窓の外を眺めながら先づこれでよろしい、と云つたやうな氣持である。

藥屋の主人の調劑してゐる秋夜の灯など歩く

北田千秋子

街と云つても、郊外の住宅地であらう、あたりの暗い中に商店の燈火がそこだけ殊更に明るい、其一軒の藥屋では店の一部を仕切つてある調劑室で、平生其顏は知つてゐる其主人が立つて、藥の調合をしてゐる。そんな事も、見るともなく目にとまつて、其店の前、外の店の前と、灯と灯とが投影してゐる道を歩いてゆく、少しうそ寒くて、人通りも少く、しみ〴〵と秋の夜だとは感じられる。かうした街上散歩の氣分にも閃き寄る季節の情趣といふものを取り上げることは、俳句のみが能くすることであらう。だが、これの季節情趣をまつかうに据ゑてゆくと、季題趣味の舊いものになる。そこを、あまりに俳句的にせずして、氣持の自然さを自然そのままに表現することが肝要である。此句はそれに成功してゐる。「秋夜の灯など……」、この「など」といふ助詞は大きなはたらきをしてゐる。しかも、はたらいてゐる風も見せずに、何氣ないやうにして置かれてある、そこがいゝ。

あした南からの軍事郵便ゆうべ北からの軍事郵便の風景

鈴木折嶺

友人は、知己は、親身の者は、南にも征つて居るし、北にも征つてゐる。朝の郵便で來た中にも一枚の軍事郵便がある、それには北の風景が印刷してある。と、其日の夕の郵便で來た中にも亦、一枚の軍事郵便がある、それには南の風景が印刷してある。その風景に眺め入ることに依つて、其風景の中で戰つてゐる其人を想ひやり、しひては、今戰爭は、北にも南にも、かくばかり何千キロの廣さに擴大してゐることの、由々しき現狀を感じさせられるのではあるが、此句はそこまで云はずして、「風景」でとめてある。そこがいゝ。それで是が俳句になつてゐる。これは俳句が風景を好むものだからではない。作者が一を書いて讀者をして二を感ぜしめる、俳句の能動性を生かしたものだからである。

小鳥の巢に雪つもり郵便配達

內島北琅

實に無駄の無い、そつの無い、いかにも俳句的の技法を生かしきつた表現である。ポツと拾ひあげて、オヽと眺め入つたやうな句である。だが、めつたに道傍に落ちてゐるやうなものではない。やつぱり、此作者でなくては見つからないものだ、だから、此作者に授けられたものだと云つていゝ。當今、かうした句を成す者、此作者の他にはあるまいと思ふ。名前が書いてなくとも、北琅の句に違ひない句である。句はやはり、こゝまで行かなくては本當でない。場所も雪國ならば何處でもありさうだが、やつぱり信州だと思はせる。これは雪が降つて晴れた朝だ。雪の枝の上には青空がある。雪の路上に朝日の影をひきながら、村の離れたところにも、郵便をとどけに配達夫はやつてくる。その配達夫も、この小鳥の巢を仰いで、オヽと云ひさうである。

月が月の光をもつてくる低い山々うしろの山の雪

大越吾亦紅

「月が……光をもつてくる」と書いても、同じ事ではあるが、月が「月の」光をもつてくるところに、冴え〴〵とした鋭さが感じられる。又、空の月は月であり、山も亦月となつてゆく、此の双對的の映發も、「月が月の……」のリズムで出てゐる。前にある「低い山々」は月のしろ〴〵とした光にあり、さうして其うしろにある高い山には既に雪が來て、その雪がまた冴え〴〵とした月の光に、銀のやうに輝き出してゐるのである。此句も作者吾亦紅の奧羽らしい大きな景觀である。さうして、斯樣な大きく幅のあるものを取扱つて、徒らに粗大散漫ならしめずに、好く引きしめて纏めてゐるところも亦、吾亦紅ならでは出來ぬ彼の手腕である。

木があめやんできのふよりさむくない汽車のふえ

井上阿彌坊

第一に「木が雨やんで」といふ表現がうまい。雨のやんでゐる景色の中に立つてゐる木を中心として、枝々に雨がしづくしてゐるその木の姿は勿論のこと、ほつと雨のやんだことを喜ぶその木の感情までも、此の「木が雨やんで……」で出てゐる。第二に、「きのふよりさむくない」といふ表現がうまい。日常の會話では、「きのふより寒くない……」などゝ、よく話す言葉であるが、その氣分をそつくり、俳句の中にうつして、俳句の言葉とすることは、何でもないことの如く見えて、實は凡手の爲し得ないところである。第三に、「汽車のふえ」が面白い。こゝには何を置いても、一應は句になりさうな場所である。「木が……

寒くない鷄の二三羽」又は、「……雀の聲」等等……。だが、此句の「汽車のふえ」程面白くすわつてゐるものは他にあるまいと思ふ。

枯桑ばたけにはいつでも冬の雲の、學校　　井手逸郎

油繪の風景をおもはせる。又、暖い國の風景だなと思はせる。枯桑の束ねてある畑は、それだけでは寒くも見えるけれども、此上にポッカリとした二三片の冬の雲を浮かせると、"ほか〳〵としたぬくいとさを感ずる。それが「いつでも」と見てゐるので猶更さうである。又、この「いつでも」には、其土地の產れではないが、其土地に住み慣れたといふ程の親じさが出てゐる。それで爰に「學校」を見出してゐる氣持にも、しつくりと乘つてゐる。「冬の雲の、學校」とコンマを入れてある、此のコンマの手法も此句の呼吸を好く生かしてゐる。若し、コンマ無くして「冬の雲の學校」と續くと、冬の雲が學校にかゝりすぎる。冬の雲は枯桑ばたけの上にあり、學校は枯桑畑の中ともなく、その邊にポッンとあるのだから、そこに空氣を隔てゝゐる距離が出なくてはならない。此の空氣をコンマで表現をしてゐる。且つ「冬の雲の」の「の」と云ひさして切つてあるので、此空氣は大さうのどやかであつて、冬の雲のへう〳〵たる姿が輕くやはらかに浮き出されてゐる。

最後にいふ言葉も言つてしまふと征つてしまふ　　堀英之助

戰爭に臨んでの歡送、惜別、鼓舞、熱意といふものは、短歌にすると、大さう勇ましくも、雄々しくも、又、非常にすらりと、おほらかにも詠へるのだが、俳句にすると、ぎごちなくなる。又、季節の感情との結び付きでも見出さなくては、俳句らしくならぬ、といふ感じがするものが多い。然し、かういふ心情はすべて短歌の方に任しきつて、俳句は手をつけない方がいゝと、考へてしまつては、俳句の領域をあまりにも卑屈に限定するものであらう。此の「最後に……」といふ句は、その點を立派に解決してゐる一つである。かつて、故山頭火に——

再び踏むまい土を踏みしめて征く

これも、よく斯樣な熱情を俳句として詠ひ上げて成功した一つである。

各家近什

横濱　芹川鳳車

松が一本飛石が三つ朝の雨ふるさま
障子に木の葉が張り込んであつてしまつとる
止むまで降つて止むときの雨のふつてる
暮れゆく時の東京の街の暮れはじめる
夜になつた星が無數に光りニュースの前の軍艦マーチ

山田宗作

日出る野のうすい霜大戰果充つ
冬朝碵に巖ありこどもたち
こゝに多山の斷面の日南に坐り
いま著きし山の寺もみぢの觀音さま
木を焚くそこらうすいけむり消えず

神戸　田中井夢

黄菊白菊御遺族着席

岩が海に秋のてふてふ　加々美青河

まつり月の稻の出來が月夜みちの鳥居

驛からちよつとあるので俥で雨の稻木の稻

いこふに巖のさくらもみぢ更に登るにあたたかい空

歩きはじめし子を持ち石蕗の花黃なる一日　東京　米倉勇美

工場霧の夜を灯し見えて霧うごく

いちにち水のながるゝ蓼や赤まんまの花のこの溝

けふに妻の手に見る荒を菊は莟めり

水べ水草枯れ家の裏口　東京　米倉勇美

秋風に捷報續く鴈の聲（臺灣沖戰果）

霜を呼ぶ鴈の高音よ大戰果

神寂びの大戰果沸く秋深み

石光り秋風に神國嚴然たり

高光る御子の御稜威國嚴然

雪吹つこむいわしのはだ　茨城　藤崎麥村

青んでとろとろ噴井の眞冬といふ陽ざし

凩、日を沒れた鵯鵐が火の粉のやう、山並

みんなみに日の美しい眞多うまれたいへ

隣りきんじよまろくいつてふるさと枯れた空

嚴大き二十立つ三十立つ磯ひき潮の冬旦　大阪　長屋青橙

多ひる斷崖の壁臺から快晴の海熊野灘

もみぢの熊野のやま太鼓打鳴る社へまゐる

敵に對ふ大戰つゞく人々稻を刈りをる

多來るおもひ木のもとに嬢の中へ日てり（悼）　東京（九貫十中花

凪いでは鯊釣れぬ沖をなぜ鷗は飛ぶのだらう

海がもう寒くなつた舟にゐる魚見の人

みんな細身の鯊で釣れてくる舟の舷

鯊と小さいめごちとまじり舟底を釣る

八つ手の花白い戰果は正午にあらう

陽のぬくさは石、茶の花も咲いてゐる　東京　山本蒼天

秋、ながい橋を渡り日ざし日ざなか

メリゴランドも日曜はまはり萩咲いてゐる

いちじくうれてゐるのと青いのと朝早くて雨

秋の青いものが日のおちてからもぬくみある畠

悔ゆ日の多き靈顏わくら葉をはふ　長野　關口比呂志

午睡のはね井ある家向日葵と夕顏の大き

擬裝鐵兜もわくら葉の陽の手をなどかざめ

胸ド掌し今日も落日のねむの花（悼）

臥してはわくら葉とも蟲ともなく鐵甲の露冷えん

工場を出でて清涼戰陣訓もてり　兵庫　蓬萊鶯郎

間引菜の籠さげて西へ太陽へ近づくやうに歩く

濁りさして鮎下る水嵩に寄りて人々

いなご追ふやうに行く畦草の中の藜草

田が家が平たい葦山を下りる周筋

カンナがもゆるラジオ臺灣沖戰果　秋田　佐々木石々

はえを食べたい友の來るはずなはえを釣りに秋

琳開柿屋が桶屋してゐる山へきけてゐる

佛へ配給のいもゆでて其いも持つて畑へ

東京　佐々木四雨樓

百舌鳥は空から逆まに落ちて來て一醒

みちばたいなご動かず稻は伏したり

疎開兒童にみちのべどこも咲く草の花

子供泣いたりして育ちゆく地に秋日みちたり

大阪　木戸夢郎

糸瓜の骨のやうな其蔓水とるとする

配給されて綿のやうなあひるの子で歩いてゐる

朝雲に月がかかつてよう寢て起きた子供の瞳

その木露けくて夜明け時梯子かかつてゐる

萩の花べたべたと峠雨やんでゐるお送り申す

下關　平賀星光

御羽車の御通り灯もつけずラヂオ聞いて居る（靖國大祭三）

軍神に默禱すおのづと呼吸のはづむを覺えつ

地圖の前に菊活けつ、神兵祭るこの夕べ

多陽が馳走とて座布團を縁に柿右の皿など

柿をつるせば紋付鳥とて枝に來てゐる

結城　渡部嫁ヶ君

稻積みあげし上に積みたすに兒は呼びかくる

稻刈ればそこに草生えてある雲の濃き夕

淺蟲川湯を吐いて海に入るか朝霧こめて

淺蟲入江みくにの祈りする小菊山の小菊

豐橋　鈴木折嶺

ポンポン舟も月の山にのぼりて月夜となる湖

戰果日に日にあがる空向いて赤うなるたうがらし

いい日でして祭へいくいちじくの木の下の白いにはとり

湖に沿うて柿畑の柿が赤うなる橋に子供

山がもみぢする山へ道行くに道の上の學校の紅葉

浦和　山木六合

甚猛なり戰果に胸たぎるおもひ鳥居をくぐる

霧霽れてくる穗田のはろかまだ霧ある山

子ら屈託もなく樫の實落ち溜れる地の窪

芋をかぢり刈田の畔この子左前に着てゐる

學校終えると畑で働き祖父も父も鄉兵

大阪　中原我樂

學童顔を揃へ椎の實はらはら落ちてくる庭

學童と交つて寢る布團整然と敷きし

不昧公にゆかりの庭ときく多霧晴れてゆく庭

朝は裏の流れに口そゝぐ菜畑の霜

工員は工員同士語る日蔭多草

福岡　木村緑平

道がくらい雲が月夜になる松の木

火叩棒は水槽のよこに月が明るい每晩

每年うれる柿が母の日家の前柿の木

決戰、たくましく大根根を入れて來る

兵を送り兵を送りまた豆蒔くときになつてゐる

一宮　伴野龍

いなごうごかず水の葦の葉さき

まひる陽つよく苞麻の實一つづつ採る

みはろかす街の河くねりさぎりたち

列車ははたしなき野のみのりの中へ

小春の陽ざしに酔ひしか船揺れねど　東京　今川溪花

雨多い蓮田花咲いて隣人

兵魂走りつゞける秋日磧が見えてくる

防波堤と沖の汽船との距離釣舟のある秋の日

水平線に動く雲舟にある子ども

冴えてきた空を飛ぶ白鷺展けた磧の方

諏訪　原蝦煎子

街燈に灯があるを通り瓜の花の明けきつた道

畠の黍殻の風も雁が來初めた湖の波、

栗を拾つた栗豐年、稻も垂り穗の稻たば

糸瓜垂れてる夕日勤勞もどつてある

南瓜の花が朝のみちラヂオ體操町ではしてある

東京　福島一思

靖國の社をこゝろに木の栗の實を仰ぎ

雨はれ木の大き落葉一隊こゝに屯す

いてふの實大方落ちつくしたそこにて話してある人たち

少女出勤部屋の鍵一つもち秋朝

秋の風ふく夜野のみちをゆくに感じ兵舍

但馬　井手逸郎

稻刈つてある山のかげりそめてある道

家のそとからさして家のうちにある日ざし

川の淵瀬しづかに疊つてあるのが稻架と桑の木黃葉

らつきよの花がさいてあるのがおまつり

秋の川すぢの見ゆるところの山にして炭やきのけむり

東京　上原晃雨草

雜雲に赤とんぼかくむれ戰ふ國の工場

鐘乳洞の常闇の樂はサイパン島も奏でてゐるか

雲、あらしともなる風の傳書鳩ながれては翔り

出迎へのあ子抱き請がゆの匂ぬくく靴をぬぐまや

お諸ふけてるにとんで歸つてとんで出てゆくと唱歌

福岡　加藤迷々可

鐵管ごろごろ實草に敵擊つ工場が出來る

落葉踏んで切通し馬車が一臺來る音

遂にやつた胸のすく戰果へ職場の眼が吸ひつき（臺灣沖空戰）

感涙おのづと秋晴から戰果世界に放たれ

神の心もて敵艦へ散つた櫻返咲きて（謝特攻隊）

高岡　森抱葉

めうとで炭團をつくつて夏のおとろへ

里芋の土寄せをして秋が來てしまふ

秋が海から來る日で日曜出勤

薄を見る朝がめづらしくて白服で

街のお醫者さんも征くので薄の驛

東京　宮林釜村

押されるまゝに押されて來秋風の中

直ぐ柿の木へのぼり子供さけぶ聲

みたみわれ立つ多ざれの土厚し

低いかなめ垣から多ざるゝ野へ

男大斧負ふて來多ざるゝ道一筋

名古屋　池原魚眠洞

橋にこども水に日の暮れてゆく

そんなことで夕立のあとの道のやはらかさわかれてゆく

あらしにならずにすんだ雨で明けてある運河の船

訪ふとゐて女あるじにて支關の花がすすき

給仕さん口笛ふいてゆきまして枝のざくろ授業中　秋田　池田亜杜子

向ふに渇でみんな秋すきた田圃で　孫の音信が絶えてゝ戰果の報ごと拜む

とても草の實にてふみ歩き　山波雜木赤黃映えする百舌も鳴かずに（山崎隊長葬）　岩手　加賀谷灰人

人若く朝雲鳥渡り

この日との時あり地の秋たかい日ざし

晩秋のお宮の止でみんな日向で　下關　近木黎々火

月と木とおちる葉が裏口　暮れ　て　なほ　山

昏れずに壁月になる　冬木の書齋にゐるだけの日暮れは窓を閉める　吳　村尾草樹

空つぽの川の橋送られて征く　あるきに出て秋祭してゐる舊い町で

海の見える石段を、浪ばかりの海　コスモス、ぬひ針自分のもの繕ふことする

征つて來て戻つてゐるあめ　東京　細木原青起　豆畠多に、雀たち秋のひる

ぐるりの山も秋晴れて寮の祭してゐる　新潟　稻垣一鳴

多くる夜一刀を前にし輿白くてあり

散るは木の葉やしる深く玉砂利を踏む　はぐれ雀とおもふさびし人の顏見てて

水邊空をうつし彼らが一死を念ふ秋草　若きひとのてのひらの南瓜子と坂を

栗一枝を採り勝利のほか考へることなし　思はぬ一茶の句秋暑きがに首

いくさ勝ちつゞくこの夜月夜の松高い　頻白の頻見てゝふつとんぼ返る

山風霰をとばして山砲隊軍歌で通る　鎌倉　井出台水　がこは蛙まひるさへ波風ぐ　近江　若林乙吉

草にふる雨が霰となつてふる道祖神さま　山裾こゝ田が集れば朝の稻扱機鳴り

蛇取爺さんのくさい煙草土手草かれてゐる　谷に傾斜あり稻扱機が鳴り又他の方向に鳴り

まつすぐにといふまつすぐに行くかれすすき　山に入つて何の鳥ありこちら見て或日夏

銀錨冶このごろ閉めてゐて黃菊日のあたり　供出丸太つぎ〳〵すべり來る盆近き日

山風霰をとばして山砲隊軍歌で通る　草山に小道ありて戸口に盡きるに男

米城の達磨に贅を畑は雨なので

借りて、植るばかりの鉢二つ三つして茶の花もう寒い

ダリヤが一つ いつ見てもこちら向いてゐる畑と隣

とほるときのぬくいにほひ稲架のひとにあいさつ

桐の花や薪運搬の幼き列のなか先生運動帽

甘藷の蔓など干して、これから永い冬がくる山が据つてをる

東京　南　晴星

があ〳〵あひるを飼ひ爺さんときに庭木に登り

青しも葱の畑村を線路がとほり

芒を朝夕に見るくらし夕べはおのづと膝たゞす報道

落花生ほろ〳〵とれる庭隅の畑黙つて引いてをれない

けふの新聞を取つて置く四つにたゝみ秋夜（神風特攻隊）

富山　高橋良太郎

夜々に月はあかるくしろき雲のよもに

生れかわつて來ねばどうにもならない蓮の葉の枯れ

手のぬくとさつめたさを言ふてわかれともない

ひるしぐれる家の中に見えて火の燃ゆ

空襲必至といふちつちやい富士を東京多

一隊は稲ばせの道空の青さを進む

星座のお話は歩いてくる露路の蟋蟀

秋雨、馬を通して橋は歪んでゐる

烏飛びたつと障子に朝の白さはある

葉は木からはなれて街の片側へ吹く風

東京　高橋晩甘

庭の赤松と萩と萩はやすがれて二株

小鳥がたくさんをり僕も來て住むと雑木もみぢする

間引菜の萎れて二三日藷の底にありぬ

寡默日本の男八つ手花さき

工員若くて多朝の構内ところ〴〵の潦

山形　和田光利

土の冥さここにまつかな鶏頭なり

いつぽんの花に何度も蝶がくるしろい雲も

深山の澤胡桃をおとしてゐる子供そのそばに犬

山から朝日、分教場であり稲田の火の見であり

山國の白いしんぶんをみせらるる客として

東京　江島雨煙

虹や羽音にみのり果のいろ兒の疎開地（疎開兒童）

稲掛け笑まひ刈るや刈るさに追はれ明くる夜

山喜れもみぢ椋鳥の群ら音を驅け〳〵歸る

千曲川なにさて爐に語り更く明日の一ト網

かはせみ追ひて子のつぶ取るへ秋川原陽ふく

名古屋　鈴木あつみ

うすらへるあり清廉なるもの鮒黒く凍る

多の來し亜炭山小松山肌に根を張り

坑内濡るゝところ亜炭息する三尺の層

霜へ工場へ行く身形が出來て出て行く

多ある時多葉のそば掩蓋防空壕の家族ら

秋田　大越吾亦紅

月はくまなく高く家は田んぼの伏せ家

青桐の幹走り風がふわふわと浮いて過ぐる

供出米のつづく車の或車子どものせてをる

汽車は靜かに燃ゆるもみぢの山を私も車内

我が家の日にてつて黄菊喜れて黄菊

句輯

喜谷六花

三百十二機に合掌栗むく盆を卻ける
牛蒡掘長鋤を執り山遠く地平らなり
章一郎軍に徴さるとて書籍を返しにくる秋の日
通草たべる男は核を吐き核をはき無言
人ひとりたんぽゝ咲くに目を落し霜晴
蝗袖に來て離れず佇つとはなし路のほとり
吾が句報國綿入の膝に手を置く

秋山秋紅蓼

蹄をとればよ古里は野菊咲きみだれ
大樹と暮れかかる富士と多に入る家
青空柿の實一つ竿にはさんである子供
山羊と兎と玉菜畑が朝である遠い山
今宵雨になり古里の柿など燈下
敵影雲に消え木々美しく冬なり
地上布陣堅く八ツ手花咲く

朝倉九鵬子

神機必來秋の高ぞらなにか寢覺めのよき
しんけんだ吾らも胸すく戰果家路月あかり
月をみるにも想ひはろばろ戰果は南から
きはひ砲戰裡われも在りき夢も此の頃
神機到るとばかりおお爆炸吾らが若櫻
生き身神也敵艦め逃ぐかとて舵のきく艇雷
生き身神也血ぶく爆雷と天翔けりだつ

細谷不句

霧の中へ入つた一人の兵隊腰下に提げ鞄
大根を賣れない言譯をする袷着た少女
空氣銃提げて來る男が上衣が袖が長く
眼帶したかみさん遠くへかへる小菊をさげ
耳が大きいこの人甘藷賣つてくれる氣持
多の日が來唐箕藪石一つ一つ
大きい包物さげる人竹刀もつ少年蜻蛉とべり

内島北琅

疎開學童秋雨の牛がみて鳴く
高い山に雪が來た柿を一つあて持つ
馬のはたがあつたかい青い大根ばたけ
白樺に白い雪ふる湖の水
白いカンバス雪のかかる山を畫いてゐる
熊笹火に焚いて鹿膽のはな火のそば
秋の紅い山を描きに火を焚いてゐる

奥村四絃人

秋風の吹流青が赤に鐵甲きりりと

雲引くが敵機大君おはしします碧空けがし　古林巴水樓

鐵甲ぬぎ雲みるみる晴れた空深々かむる　まだ陽のある多草旗は捲いて歸る

海陸の將士神風まき起す菊に合掌　石、石蕗の花と日向になつてゐる

軒端夜明に遠く木の實さながら機銃掃射　朝、雪をつけた富士と子どもたち學校へゆく

捷報に次ぐ捷報深々の空にひろごり　松宮寒骨

庭木に烏瓜赤うあろじ居るらしい聲音　伊東俊二君を訪ふ

安齋櫻磈子

無音家に遠ざかるごとし枯れし芒の山
素足畠に麥を蒔く素足畠に火を赤く焚く
皆少し動いて居る清淨氣の生蝦
ひとり葱を刻むに風はたとやむさうした夕
いつもの調子機を織る薄雪の山にもなじみ
旅は仔牛と黄雞頭と小春村口
かくて霜月糸を干す男に暮れて行く空日々

原鈴華

ずんずん稻田の中あるく小犬が走る朝
夜をきく葉音また葉ずり月しろく
立てば山立てば河秋風に鍬下ろす
木は多へまたおちるおちば焚く朝
一兵となる日來る秋の風しろし（入營三句）
大みいくさわれ一兵とし軍醫とならむ
入隊のみ旗あをぐ澄んで菊活け

山にやはらかい雲稻刈りびとのおやつの小籠
橋から見ゆる山ひといろの秋の山
芒の穗ぬれて動かない山の朝みち
茸とりに行くさうした人々つづくあさ
かけすの聲ひびく山に湖があり湖づら
野菊花さくみち畦ぐろい畦
船團行く秋空翔る機に陽の照る且

林雀背

頭上の響音こんどは隼だ子供うごかない
作業終へ開いてゐる窓すいすい空へとんぼ
切手の乃木東郷さんにつこり今も太洋大陸に
鬚をそつて鏡遠く遠くのそこ大海戰が
疎開兒へ出す葉書畫が描けたらと筆
こゝろ通ふた南瓜の大きくて重たく階段おりる
このいくさきつと勝つけふはつきりと富士

妹尾美雄

臺灣沖の戰果をそれを云はないでゐる氣持障子を張り
假想敵機來る穗を穫りしあとの黍畑

壕にて結論を云ふ男壕から見ゆる秋空
いなご一袋いたゞき口をつぐみて禮する

木守の柿に眞赤な夕雲の敵機が通り魔のやうな
夕星出でて山茶花の白、空襲つゞがなし

今朝やゝ塞ぐげーとるを巻き帽をかぶりわがゆく

敵機遁走した後の多田の灯、提灯一つ通る

雨空を敵機來る今日何も見えず冬野

追うて打遁した敵の事をラヂオ、遲い月出る

およそもんぺに馴染み防空頭巾といふに親しみ寒き日

空襲ののちも何氣なくラヂオ物語、多

伊東俊二

千の標語より一の現實

敵を憎めとぞ多空たかだかと行く敵ぞ

中塚一碧樓

警戒警報納屋の中うす暗く稻扱器廻す音のす

勝利日本の露朝杜と杜のべ

空に警報が出てゐる青い菜引いては籠に入れる

多夜話すにあきらかにレイテ一灣のかたち

敵機遁走そのあと整然たる町の、雨のゆきゝで

部屋ひろく縁側がありて栗をたべてしまつた

速力が影が追つて行く空の土の爆音が、秋

鴛の頬のふくらみあかるきところにて家に

まさしく敵機とみるしづけさを枝にある紅い葉

手帖のごとき一人の人物さうして多來る

追ひて追ひ迫る空の上の點、多、まさしく闘ふ

林檎赤くておもふあきらかに彼氏の痩軀

電車が停つて暗く電車を待つてゐる灯、葉が散る

杉枯枝を拾ひ岩角を踏みて

内田南艸

西垣卍禪子

疎開はみんなで少年少女秋の山々重なる

少尉の軍服で來て多日の射してをるけふ父きりで（兵隊來る）

山びこ疎開兒はありだけの聲を揃へる

筑波が晴れ一ところ子供ばかりの朝のお寺

疎開の子等同じやうな顏で遠山雪をいたゞく

きのふけふ山が見え朝を掃いてて草の少し薄霜

山茶花いとまなく落ち朝の冷えてゐる地を掃く

東京の客人が歸つてまだ鍵入れる間ある庭樹

多構へ十分茶の花の床にこぼれる

多の居間を飾ちう家人の背を日射す頃

獸呼君を送る今日はあまりに近い多山

多の日曜が掘らるる夕ともなり現はれて大石

君つゞいて征く故郷の海は青いぞ

この頃刈田の凍る夜千五百秋の瑞穗の國と子供が讀む聲

荻原井泉水

と見る友軍機の急ぎゆく多空の投槍となる（十二月三日）

編輯後記

○レイテの決戦に飛行機が敵の船腹と同數量あれば絶對に必勝であることは何人も肯定し得る所であろう。後は何にをか云はんやである。急ぎ銀製品の供出動員を行はう。物量強引の侵寇を撃滅すべき神機を逸してはならない。

○本誌は創立以來一歩一歩その理想を實現せんと努力して來た。昭和十九年も終らんとしてこれを顧るに、俳壇に劃期的業績を印し、多面的な活動を續け得たのではあるが、まだ第一段階としての過渡期に他ならないものであつた。明年こそは本誌のみに殘された使命に蹶起し益々公機としての俳句日本育成に力をつくさん決心である。

○その發足として根基的問題に思をいたす時、編輯組織の積極化、經營安定への革新、黨派的觀念の一掃、而して眞に一致一丸となつて奮起すべき實際行動の必要を考へられる。かゝる眞の一元化こそは免づ第一に諸氏の御理解と御協力なくばなし能はぬところである。

○今一つ、同志諸君へ申上げておきたいことは、俳句雜誌整備に關聯して動いて止まなかつた俳壇も、その外面に於いて漸くある落付を取戻せしかの感を受けるが、内實はまだ憂慮すべき鬱動がなきにしもあらずである。玆に於いて、本誌が現下の大決戦下に於ける俳句雜誌として、又、新俳句の作家集團として、最近の作品の底に新しき精神が如何に潜んでゐるか、或は又、新俳句集團が必勝精神の具現として國家的使命に全國一致共動してゐるか否か、かうした當面の問題に對照し反省してみる必要を特に感ずるものである。もしこの總動員的信條が實現されてゐない感ありとせば、本誌の存在意義も疑はれないとは限らないのである。誠に紙は弾丸である。單なる同人誌の要求からして發表機關をいくら陳情してみたところで、弾丸である紙は所詮手許へ送られて來よう筈はないのである。そこで、上述の根基的問題の解決と同時に諸君の頑固なる覺悟の程を願ひておきたいのである。（卍禪子）

投稿略規

俳句日本作品

萩原井泉水選のものは世田谷區松原町一ノ八三伊東方へ

中塚一碧樓選のものは世田谷區上馬町三ノ一〇五〇中塚一碧樓へ

西垣卍禪子選のものは足立區伊興町狭間八八七西垣卍禪子へ

○句數十五句以内、楷書にて清記、層所氏名を詳記のこと。

○句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一月一稿一選者に限る事。

一、締切　毎月十五日

一、購讀誌代の拂込は從前通り舊各誌の發行所宛に願ひます。但し新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

本誌定價

一冊分　金七十錢（送料二錢）
六冊分　金四圓二十錢（送料一冊二錢）
十二冊分　金八圓四十錢（同）

・前金（なるべく振替）で御拂込下さい。
・必ず何月號よりと御指定の事
・御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷　第七號
昭和十九年十二月廿五日印刷納本
昭和十九年十二月三十日發行

發行人　中塚直三
編輯人　西垣隆滿
印刷人　檜山公一
東京都小石川區諏訪町五六
印刷所　株式會社　常磐印刷所
東京二二六

東京都世田谷區松原町一ノ八三
發行所　俳句日本社
振替東京一七六〇六四番
日本出版會會員番號一一五〇〇四
配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

戰線及入營の諸氏の投稿に限り軍事郵便はがきにて差支なし

定價金七十錢

壯烈な空の決戰が國民各位の絶大な御協力を要望してゐます

銀の回收に就て

大藏省
中央物資活用協會

航空機の死命を制する發動機の中には多量の銀が使はれてゐます。銀はプロペラの高速度廻轉を助け、しかも摩擦に對する抵抗力が頗る强いのでありまして、我が空の勇士のあの凄壯な急降下爆撃には銀の力が大きくものを言つてゐるのであります。また銀は銅をば遙かに凌ぐ絶好の電導體で、航空機のやうに特に通信器を必要とするものにとつては缺くことの出來ない重要資材なのであります。今度の銀回收に付きましては、この點を篤と御承知願つて出來得る限りの御援助御協力を煩はしたいと存じます。

尙ほ金の重要性に就きましては、改めて申し上げる迄も無い所でありまして、もしお持ちの方がありましたならばこの際一人殘らず供出して頂くやう格段の御配慮を願ひたいと存じます。

◎回收の目的　銀の集中運動は皆樣御承知の通り支那事變以來何度となく行はれて來たのでありますが、今度政府が全國に亙つて一齊に急速且多量の銀の回收を實施することになりましたのは、兵器の增產に必要不可缺な銀を確保し、依つて以て優秀なる兵器をどし〱生產し、わけても焦眉の急を要する航空機を一機でも多く前線に送つて來るべき航空決戰に必勝不敗の備へを致さうと云ふ目的に出でゐるのであります。

◎銀の用途　今その用途の一、二を擧げますと先づ第一に銀は航空機の最も重要な部分を占めるプロペラの高速度回轉を助け、軸受として立派な性能を發揮して居りますと同時に、銀は銅をも凌ぐ立派な電導體でありますから精密な科學兵器や各樣の通信器械の中でも最も性能の高い輕い電導線として使用され、從つて通信器を生命とする航空機には絶對不可缺の重要資材と謂へませう。

第二に銀は獨自の用途として光學兵器の反射鏡とか偵察寫眞の乾板とかフイルムとか云つた方面にも使用されて居るのみならず、强力な接合材として所謂銀鑞と呼ばれる航空機材無電機材等の接合材或は通信機の接點にも廣く使はれて居るのでありまして、今日銀が如何に戰爭資材として重要であり且つ多方面に用ゐられて居るかが窺へると思ひます。それでありますからこの際民間に在の銀は假令一匁と雖も進んで第一線に送り出す事が銃後國民として此際何よりも急務なのであります。

◎回收物件　各家庭にある銀製品や銀地金であります。詳しく申せば花瓶などの室内装飾品、指輪、帶止等々。

◎買上方法　買上に付て場所や日時が決められますと中央物資活用協會から買上班が出張致します。供出せられる物件は直接買上場所へ持參して頂くか、或は町村に於て取纒め委託賣却の方法を採られるか兎も角地方の實情に依り定められた方法に基いて、最も都合のよい買上げを行ふことになつて居ります。

◎買上値段　政府で定めた價格即ち

一、銀製品に付ては含有純銀量一匁に付三十五錢

二、銀地金又は之に準ずるもの、銀製品としての型體を存せざるものに付ては含有純銀量一匁に付十七錢五厘五毛の割合で買上げる事になつて居ります。

買上げに付ての鑑定秤量は嚴選された鑑定員に依つて公正に、しかも市町村吏員立合の上嚴重に行はれます。

◎代金の支拂　所謂即金買上です、現品を持參して頂けば其の場で鑑定秤量の上現品と引換へにすぐ現金で代金を支拂ふことになつて居ります。

有隣亭蔵書

（明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和十九年十二月三十日（毎月一回卅日）發行）

昭和十九年十二月二十五日印刷納本